
仮面ライダーファイズ **小さな星の話**

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

仮面ライダーファイズ 小さな星の話

【Nコード】

N6032B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

オルフェノクの王との戦いは終わった。だが王は蘇ってきた。乾巧は三原や海堂、生き返らされた草加、長田、そして巡り合った津上達と共に王に向かう。再び生を得た木場は迷いの中に落ちる。しかし彼等の進む道は一つだった。HEROSAGA、アトラクションにヒントを得ました。やはり他のライダーと世界はつながっていません。

第一章 時代

仮面ライダーファイズ 小さな星の話

かつて神々は人を創ってきた。一つは金の時代。そして銀の時代、銅の時代、今は鉄の時代だとされている。

鉄を使うのが今の人間だ。それを創ったのは神だ。気の遠くなるような時間の中にその四つの時代がある。そこにいるのは人だけではなかった。

「ようやくこの時が来ました」

青年は光の中で呟いた。

「人の戦いの一つを終わらせる時が」

「これからですよね」

「はい」

あの女の問いに頷く。彼の隣にはあの青い服の女もいた。

「人と人の数多い戦いのうちの一つがやっと」

「私も役目の一つが終わるのですよね」

「長い間お疲れ様でした」

青年は女に対して述べた。

「彼等の側にもらって」

「いえ、それが私のお仕事でしたから」

彼女は笑ってそう返した。

「気にしなくていいですよ」

「そうですか」

「はい、それに面白いこともわかりましたし」

「面白いこと」

「そうです。実はですね」

女は青年に対して話をはじめた。顔がいつものふざけたような様子から少し真面目なものになっていた。それが素顔であるかのよう

「彼等はやっぱり人間です。外見は変えることができても心は変わらないんです」

「そうです」

青年はその言葉に頷く。

「そうなのです。彼等が進化したと思っているのは身体だけです。しかし心は」

「同じですね。けれど」

女の話の核心はここにあった。今それをはっきりと言う。

「王は違えますね」

「そう、あの王だけは違うのです」

青年もその言葉に答えてきた。彼は全てを知っているかのように。彼だけは。私が創ったものではないのです。そしてあのモノリスも」

「あの人が創ったんですよ」

「その通りだ」

そこにあの三つ目の髑髏が姿を現わした。

「王もモノリスも悪意によって創られたものだ。あの渋谷の隕石もまた」

「全てはあの人が」

女の顔は完全に真剣なものになっていた。その真剣な顔で語る。

「ですね」

「そうだ。まずは彼の仕掛けた罠を一つずつ潰していくのだ」

「一つずつ」

「まずは王を」

髑髏は語る。

「次はモノリス。そして」

彼等の話は続く。それが終わってから青年と女はその場を後にするのであった。

第二章 草加再び

海岸。青年は防波堤となつてゐるそこに姿を現わした。そしてある場所に行くところまで白い光を放つたのであつた。

するとそこに若い男が現われた。砂浜に倒れているその男は草加雅人であつた。オルフェノクとの戦いで命を落としたあの男であつた。

「目覚めるのです、草加雅人」

「何？」

草加はその言葉を聞き目を開けた。

「俺はあの時死んだんじゃないのか」

「そうです。貴方は確かに死にました」

青年もそれを認める。

「しかし貴方はまた戦わなければなりません」

「どういふことかな、それって」

彼はその言葉を聞いて顔を上げる。そして身体を起こしてきた。

そのまま青年の顔を見据える。そのうえで問うた。

「そもそも俺に戦わなければならぬってどういふことなんだかなあ」

「オルフェノクはまだ存在しています」

「そうか。それでか」

「それだけではないのです。考えたことはありませんか？」

「何？」

草加はその言葉に目を鋭くさせた。

「どうして生まれたのか。王とは何者なのか」

「何が言いたいんだ、あんたは」

「それを確かめるのが貴方の運命なのです。そして」

「戦つこともね」

「御前……」

そこに現われたのはあの青い服の女だった。草加はその女の名を呼んだ。

「スマートレディ！貴様アツ！」

怒りで顔を歪めさせスマートレディに襲い掛かろうとする。しかしそれを青年が止めた。

「待つのです」

「こいつがオルフェノクだって知らないのかなあ」

草加は止めた彼に対して言う。彼も睨みながら。

「まさかとは思うけれど」

「彼女はオルフェノクではありません」

青年は言った。

「嘘つけ」

「いえ、本当です」

しかし彼はそれでも言う。

「それがわかっていているから私も彼女と共にいるのです」

「草加君私をオルフェノクだと思ってたんだね」

「じゃあ何だっというんだ」

草加はまだ彼女を睨みつけていた。

「化け物なんだろうが」

「それが違うの」

スマートレディは草加を見て言う。

「その証拠になるかどうかわからないけれどプレゼントもあるし」

「プレゼントだと」

「そうよ。はい、これ」

彼にあるケースを差し出してきた。それは彼が非常によく知るものであった。

「それか」

「そうです。そしてもう灰になることもありません」

「どういうことかな、それは」

今度は青年を見据えた。

「確かこのまま変身していくと灰になるっていうことだったけど」

「それもまた貴方の運命なのです」

「全てが運命なんだな、本当に」

「普段のシニカルさを見せてきた。」

「何もかもが」

「そうよ。君ライダーだから」

「わかったさ。じゃあ精々戦ってやるさ」

「スマートレディからケースをひったくって述べた。」

「オルフェノクを倒してやるさ」

そしてサイドカーに乗り何処かへ向かう。行く場所は彼にとっては決まっていた。

青年とスマートレディは遠くなっていく彼の姿を見送っていた。

彼の姿が消えてからスマートレディが言ってきた。

「後はあの二人ですけれど」

「はい」

青年はその言葉に応える。

「彼は相当苦しみますよ」

「それはわかっています」

青年はそれに頷く。

「しかしそれもまた運命なのです。彼も」

「彼も大変なんですな、やっぱり」

「スマートレディはその言葉を聞いて悲しげな顔を見せる。」

「彼等もまた運命の中にいるのです。人の戦いの一つを終わらせる者達として」

「最後の最後まで戦わないといけないんですね」

「彼が諦めるまで」

青年はそれをはつきりと言った。

「続くのです」

「じゃあ私達も休めないんですね」

スマートレディはそれを聞いて右腕を頬に当てる。左手を右ひじ

に添えて呟く。

「残念」

「残念ですか。それで」

「だって。ずっと楽しんで暮らせると思っていたから」

「残念ですがそうはいかないのです」

「やっぱり」

「しかし退屈も嫌なのではなかったですか？貴女は」

彼は笑みを浮かべて問う。

「そうではなかったですか？」

「そうですね。やっぱり退屈するのが一番」

スマートレディもそれを認める。

「嫌だったりします」

「では行きますか」

青年は微笑んで声をかける。

「彼のところへ」

「はい」

二人は海岸から姿を消した。そのまま別の場所へと向かった。

第三章 木場の運命

かつて最後の戦いのあった戦場跡で。木場勇治は一人立っていた。彼はまだ何が起こったのかわかっていなかった。

「俺が何故……生きてるんだ」

最後の戦いのことを思い出す。彼はあの時オルフェノクの王と共に死んだ筈なのであった。しかし彼は今生きていた。そのことを把握しきれなかったのだ。

「貴方は生きなければならぬからです」

「貴方は」

そこにも青年が現われた。そしてスマートレディもまた。

「またオルフェノクとして生きると」

スマートレディを見てそう思った。しかしそれは違っていた。それは他ならぬ彼女の言葉によって否定されてしまった。

「それが違うの。残念ね」

「では人間として生きると」

「そうです。それにオルフェノクも人も変わりないですから」

「変わらない」

木場は青年の言葉に目を丸くさせる。

「そんな。人とオルフェノクは対立するものの筈だ、それがどうして」

「それは貴方の誤解です」

青年は述べる。

「その誤解もまた解けるべきなのです。さあ」

そして木場に声をかけた。

「行きなさい。貴方の行くべき場所に」

「行くべき場所」

「それは木場君が一番わかっている筈よ」

スマートレディはにこやかに笑って彼に述べる。

「何処に行けばいいのかは」

「わかった」

俯いてそれに答える。

「俺の行くべき場所に。行って来る」

彼は二人に言っただけでその場を去った。そのまま彼が行くべき場所に向かうのであった。

「後は彼女ですよね」

スマートレディはまた青年に声をかけた。

「行きます？」

「いえ、彼女はもう向かっています」

「あら、もう生き返らせたのですか」

「いえ、彼女はあの人を蘇らせました」

青年は言った。

「既に彼等の場所に向かっています」

「あら、もうなんですか。それはびっくり」

「ただ。少し時間がかかると思います」

「どうしてなんですか？」

「会わなければならないからです」

「誰と？」

「アギトと」

それが青年の言葉であった。一言であった。

「彼等のうちの一人と会う運命ですから」

「そうだったんですか」

「皆運命に導かれているのです」

青年はまた言う。

「乾巧、草加雅人、三原修二」

三人のライダーの名を。

「木場君もですか？」

「はい。そしてアギトの戦士達もまた」

「ええと。確か」

スマートレディは記憶を手繰りながら述べてきた。

「津川翔一君に氷川誠君、葦原涼君でしたね」

「そして木野薫」

かつて彼と戦った男達だ。今では彼等もまた青年と想いを同じくさせている。

「彼等の力も必要なのです。オルフェノクの因果を終わらせる為には」

「ですか」

「そうです。では次はですね」

「私の仕事ですか？」

スマートレディは青年に問う。

「やっぱり」

「天のベルトと地のベルト」

青年は静かに語る。

「そのうちの一つをお願いできますか」

「一つでいいんですか？」

「一つしか手に入らない運命ですから」

それが青年の答えであった。

「それで構いません」

「わかりました。じゃあスマートブレイン社に一旦戻ります」

「はい」

それからですね。また話が動くのは

「スマートブレイン社はまだ動いていましたね」

「かなり規模は小さくなっていますけれど」

彼女はそう説明してきた。

「ただあの人が社長になっちゃって」

「あの人はですか」

「はい。多分皆もこれから」

「激しい戦いになるからこそ」

青年の声が引き締まったものになった。

「もう一つのベルトが必要なのです」
青年はまた手を打とうとしていた。それによりまた運命が動こうとしていた。この時運命の一つがはじまるうとしていた。

第四章 長田の出会い

長田結花は今一人で街にいた。まだ何が起こったのかわかってはいなかった。

「また生き返ったっていうの？」

夜道を一人歩きながら呟く。その周りを人が通り過ぎていく。

「何が何なのか」

わからなかった。どうして今ここを歩いているのかも。ふと歩いているうちに道で絵を売っている男に気付いた。

「え……貴方は」

長田は彼の顔を見て目を丸くさせた。そして彼も。

「結花、御前どうして」

「海堂さん」

二人は顔を見合わせる。かつて共に志を同じくさせていた二人であつたのだ。

「生き返ったのか。どうして」

「黒い服の男の人に会って」

長田はそれに応えて言う。

「それでこうして」

「黒い服の男か」

「そうなの」

長田は語る。

「それで私が行きたい場所に行けって言われて」

「それが俺のところか？」

「海堂さんに会ったのは偶然です」

「そうか。何だよそれ」

海堂はそれを聞いて悪態めいたことを言ってきた。

「俺と会ったのは偶然っちゅうのかよ」

「だって何してるか知らなかったし」

「今絵を描いてるんだよ」

彼は悪態めいた口調でまた言った。

「とりあえず生きないといけないからな」

「それが海堂さんの絵なんですね」

ちらりと彼の絵を見た。見ればかなりのセンスがあった。

「ギターよりいいかも」

「これでも売り上げいいんだぜ」

彼は自分でそう述べる。

「今日もかなりいい値段で売れたしな」

「そうなんですか」

「おう。それで何処行くんだ？」

「とりあえずは」

少し考えてから述べる。

「啓太郎さんのところに行ってみる」

「あそこにか」

「ええ。多分あそこに乾君達もいるから」

「そうだな。じゃあ俺も後からそっちに行くぜ」

「海堂さんも？」

「俺が行っちゃ悪いってのかよ」

そう彼女に問う。

「何か嫌な予感がするしな」

「そうね」

長田もその言葉には頷く。

「じゃあ店片付けてからな」

彼は言った。

「そっち行くからよ」

「ええ。じゃあ啓太郎さんのお店で」

二人は一旦別れた。そしてまずは長田は一人で啓太郎のところへと向かうのであった。

海堂は一人になった。絵をなおしはじめる。

「しっかし量が多いな」

自分で自分の絵を見て言う。

「自分で描いておいて何だけれどな」

顔が苦笑いになっていた。その顔で述べる。

「多いねえ、全く。毎度毎度なおすのに一苦労だぜ」

「あの」

そこに一人の青年がやって来た。

「よかつたら手伝いましょうか」

「ん！？あんた誰だい」

その青年に顔を向ける。そこにいたのは。

「葦原涼」

彼は名乗った。オルフェノクとアギトの出会いであった。

第五章 草加と木場その一

同じ夜空の下で。乾巧は園田真理と共に夜道を歩いていた。二人の手にはそれぞれ風呂桶がある。

「たまには銭湯もいいもんね」

「そうだな」

乾は真理の言葉に頷く。

「気分転換になっていいな。しっかし最近の銭湯って何かすげえな」

「そう?」

「サウナはあるし色々な風呂はあるしよ」

乾は言う。

「あれがスーパー銭湯っていうのか」

「そうよ。まああれは普通の銭湯だけれど」

「それでもかよ」

乾はそれを聞いてもまだ驚いたままであった。

「普通の銭湯でも」

「けれど楽しかったでしょ、男湯も」

「ああ」

その言葉には頷く。

「じゃあ帰るか。啓太郎も待ってるしな」

「三原君もね」

「そうだな。今日はあいつもいるしな」

乾は彼の名を聞いて笑みを浮かべた。

「じゃあ帰ったらゲームでもするか」

「何するの?」

「格闘ゲームでもしようぜ」

彼はこう提案してきた。

「皆でな」

「いいね、それ」

そんな話をしながら楽しく帰っていた。しかく啓太郎の家に着いてそれは一変した。

「……………おい」

乾も真理も家の前に止まっているそのサイドカーを見て声をあげた。

「何でこれがあるんだよ」

丁度家の前に立っていた三原に問う。

「もう壊れたんじゃないのかよ」

「それだけじゃない」

三原は乾に対して強張った顔で言ってきた。

「とんでもないことになっている」

「何だ！？オルフェノクの残党でもいたのかよ」

「違う」

彼は言う。

「いいから家の中に入れてくれ。そうすればわかる」

「何だっっていうんだよ」

乾も顔を強張らせていた。実は彼も嫌な予感がしていたのだ。

「あつ、たっ君」

家の中から啓太郎が飛び出て来た。そして彼も乾に声をかける。

「帰って来たんだね、待ってたんだよ」

彼にすぎるようになってきた。やはり何かあったようである。

「どうしたのよ、あんた達」

真理は玄関の灯りを頼りに二人の顔を見ながら問うた。

「おかしいわよ、何があったのよ」

「あのね、帰って来たんだよ」

「帰って来た！？」

乾が啓太郎のその言葉を目を顰めさせてきた。

「誰がだよ」

「それがね、あの」

「久し振り、かな」

「何っ!？」

玄関からまた誰か出て来た。灯りに照らし出される顔を見て乾も真理も思わず息を呑み目を瞠った。

「御前、どうしてそこに」

「草加君」

「生き返ってきたんだよ」

草加は首を少し左右に動かしながら二人に言ってきた。

「あの海岸でな。黒い服を着た若い男とスマートレディにカイザを受けてな」

「スマートレディに」

乾はその名前を聞いて目の光を強くさせた。

「あの女、まだいたのか」

「話はそれで終わらないんじゃないかな」

「どういうことだ」

「あいつが生きているってことはオルフェノクもまだ健在だってことさ」

草加は言う。

「あいつ!？誰のことだ」

「わからないかなあ。木場だよ」

「木場!？あいつは」

「俺にはわかるんだよ」

草加はそう言いながら玄関を出た。そしてゆっくりと広場に向かう。

「巧っ」

真理が乾に声をかけた。

「行こう。木場さんが本当にいるんなら」

「ああ。まさかとは思うが」

「俺も行く」

三原も出て来た。

「俺も。何か大変なことになってない!？」

啓太郎も。彼等はそのまま草加の後について行くのであった。
草加は広場に着くとそのまま立っていた。じっと向こう側を見て
いる。

第六章 草加と木場その二

「乾、三原」

そちらを見たまま二人に声をかけてきた。

「手出しはするなよ。いいな」

「しかし本当に木場さんが」

啓太郎はまだ話を把握できてはいなかった。驚いたまま言う。

「生きているなんて」

「いや、あいつが生きているんだ」

しかし乾が言う。

「木場だって生きていても不思議じゃない」

「けれどそうだったら」

三原は暗い顔で述べる。

「オルフェノクの王も」

「そう、オルフェノクの王だって復活してるよ」

向こう側の暗がりから声がしてきた。あの懐かしい声であった。

「ロブスターオルフェノクによってね」

「それで御前はまた俺達と戦うっていうのかな」

草加はその声の方を見据えて問うた。

「木場、いるんだな」

「ああ」

木場が姿を現わした。暗闇の中からすうつと出て来た。

「やっぱり生きていたんだね」

「お互いな」

草加は激しい憎悪に満ちた目で彼を睨み据えていた。

「あの時のこと、忘れてると思っちゃいけないよな」

「勿論さ」

木場もそれに答える。

「なら話が早い。借りを返させてもらおう」

カイザのベルトを着ける。携帯のボタンを入れる。すると電子音がした。

「スタンディングバイ」

「変身」

草加は携帯を前にかざす。持っているところをあえて見せて腰のベルトにセットした。

「コンプリート」

また電子音がした。黄色の光の筋が数条身体を覆い変身した。カイザであった。

木場の姿も変わっていく。ホースオルフェノクになった。

「さて」

草加はまずは右手で首のネクタイを絞める動作をしてきた。

「行くか。一撃で仕留めてやるぜ」

「こちらも。因果は終わらせないといけない」

木場も言う。

「だから」

「死ね」

草加はいきなりブレイガンを放った。それで一気に撃ち抜こうとした。

しかし木場は右に飛んでそれをかわす。そのまま剣と盾を手にカイザに向かう。

「うおおおおおっ!」

「甘いつていうのかな」

草加はその動きを見て呟く。

「動きが見え見えなんだよ!」

そう言っつてブレイガンの剣で切ってきた。逆手で下から上に一閃させる。

だが木場の動きも速かった。彼等は同時にお互いの胸に攻撃を受けてしまっていた。

「ぐわっ!」

「うおっ！」

木場と草加は同時に声をあげる。しかし先に起き上がったのは草加であった。

「どうした？前より弱くなってるんじゃないかな」

「何？」

「この程度じゃカイザはやられない。覚悟するんだな」

「くっ！」

「じゃあケリをつけるぜ」

脚にポインターを装着させてきた。

「これでな。トオッ！」

跳んだ。空中でロックオンする。

黄色の光が木場を捉えた。そのまま両足で蹴りを放つ。

「うおおおおおっ！」

「木場！」

「木場さん！」

乾達はそれを見て声をあげる。だが木場は立ち上がっていた。

そして反撃に転じる。剣を渾身の力で横に薙ぎ払う。

攻撃は相打ちであった。草加も木場も大きく後ろへ弾き飛ばされた。その際カイザのベルトが外れ草加は下の姿に戻ったのであった。

「くっ、まだだ」

しかし草加はすぐに起き上がる。やはり何かおかしかった。

「乾」

三原が彼に声をかけてきた。

「どうした？」

「草加の身体能力があがっていないか」

彼は言う。

「どう思う？」

「そういえば」

乾もそれに気付いた。

「あいつ、前よりもずっと」

「それに耐久力も。前からかなり高かったけれど」

「まるで俺達みたいだ」

彼はここで言った。

「そう、まるで」

「ここで御前は倒してやる！化け物が！」

草加は激昂した。するとその顔が見る見るうちに変わり灰色の身体になっていく。何と彼もまたオルフェノクになってしまったのであった。

第七章 オルフェノクその一

「何っ!？」

「草加さんが」

乾と啓太郎が思わず声をあげた。

「何っ、オルフェノクの因子じゃなくてオルフェノクになっただけと」

「馬鹿な、君がオルフェノクだと!？」

木場も我を忘れて思わず声をあげる。

「そんな馬鹿な」

「クっ、こういうことだったのかよ」

草加は己の禍々しい手を見て言う。見ればその姿は鮫のものであった。シャークオルフェノクとでも言おうか。尖った顔に鋭い無数の牙を持っている。

「俺も化け物になちまったのか」

「馬鹿な、彼までオルフェノクに」

「いや、それは少しも不思議なことじゃない」

そこに一人の青年がやって来た。後ろには長田もいる。

「結花、君まで」

「木場さん、お久し振りです」

長田はまずは木場に挨拶をしてきた。

「生き返ったのか」

「ええ。そして木場さんに言いたいことがあるの」

「言いたいこと!？」

「それは後で。津上さん」

「わかった。結花ちゃん」

その男津上翔一は長田の言葉に頷いた。そして語りはじめた。

「俺の名は津上翔一。仮面ライダーアギトです」

「ライダー!？」

「じゃあ俺達と同じか」

「同じです。けれど違います」

津上はここで自分達と彼等を同質でありながらその存在を異にする者同士であると言った。

「しかし俺達もオルフェノクと戦う為にここに来ました」

「どういふことなんだ、一体」

木場はそれを聞いて言う。

「わからない。同じとも言っし」

「そうさ、同じなんだよ」

また誰かが来た。それは海堂であった。

「海堂、君までか」

「木場生きていたんだな」

海堂は首を左に傾けたまま言ってきた。

「御前まだ悪い夢を見ているみたいだからな。覚ましに来たんだよ」

「海堂さん間に合いましたね」

「まあ色々あったがな。御前何か若い兄ちゃん連れて来たのかよ」

長田に顔をやって津上に気付く。

「俺と同じってわけか」

「津上、御前もか」

「葦原さん、貴方もここに」

「何だ、御前等も知り合いなわけか」

海堂は二人のやり取りを見て目を丸くさせる。流石にこれは予想してはいなかった。

「全くな。世の中は狭いつちゅうか」

「それでだ」

乾が問うてきた。

「さっきの話だが」

「俺が話した方がいいな」

葦原が出て来た。

「あんたがか」

「ああ。俺の名前は葦原涼」

まずは自身の名を名乗ってきた。それから話に入る。

「仮面ライダーギルスだ。そしてアギトの力も持っている」

「アギトの力!？」

「簡単に言くとオルフェノクと同じだ」

彼は言う。

「変身できる。しかし俺はライダーになる」

「ライダーに」

「そうだ。今それを見せる」

そう言つと両手を顔の前でクロスさせた。そうしてエクシードギルスに変身した。

「その姿……」

「やっぱりな」

海堂はエクシードギルスを見て言った。

「同じだわ、俺達と。色が違うだけだな」

「そうですね」

長田もそれに頷く。

「アギトとオルフェノクはやっぱり似ていますね」

「っていうことは」

啓太郎は今までのことと今の長田の言葉を聞いて言った。

「ええと、葦原さんですよ」

「ああ、涼って呼んでくれ」

「涼さん、貴方はまさか」

「そうだ、見る」

彼は言う。

「この身体、オルフェノクと似ていないか」

「オルフェノクとですか」

「俺、いや津上もアギトに目覚めて変身できるようになったんだ。

そして俺は一度死んで進化している」

「それって同じですよ」

啓太郎はそれを聞いてまた言う。

「オルフェノクと」

「ああ、その通りだ」

乾がその言葉に頷いてきた。

「オルフェノクも一度死ぬ。そしてそこから進化する」

「今の俺みたいに、かな」

人間の姿に戻った草加がそれを聞いて述べてきた。彼は暗い顔を
して俯いていた。

第八章 オルフェノクその二

「じゃあアギトも」

「似ているってもんじゃねえな」

海堂が言ってきた。

「ていうかまんま同じじゃねえか。どういふことなんだよ」

「そこまではあの人にも教えてもらいませんでした」

「黒衣の青年だよな」

葦原が長田の今の言葉に問うてきた。

「はい。あの人はオルフェノクも人間と同じだと言いましたけれど」

「そうか。やっぱりね」

木場はそれを聞いて頷いた。

「俺もそんなことを言われたよ、その人に」

「そうなんですか」

「スマートレディもそこにいたけれど」

「何っ」

「俺の時もだ」

乾が驚いていると何と草加もここで言ってきた。

「あいつは………オルフェノクじゃない。かといつても人間

でもなさそうだがな」

「一体どういふことなのよ」

話がわからなくなってきた真理が言う。

「生き返ったと思ったらオルフェノクとアギトだの。一体どうなっ

ているのよ、皆」

「俺もよくわからないんだけどさ。何か謎の核心っぽいよ」

啓太郎がそれに応えて言う。

「そうだよ、たっ君」

「ああ。アギトとオルフェノクか」

乾はその二つを呟く。

「今まで俺はオルフェノクだけを考えていた。しかしそれだけじゃない」

彼は言う。

「アギトか。何か凄い謎がありそうだな」

「アギトは白衣の青年により人間に与えられたものだったんです」

津上がそう述べる。

「この話は長くなりますけれど」

「じゃあ今度にしよう」

三原がそう提案してきた。

「今日は真夜中だしな。皆それでいいよな」

「ああ」

まずは乾が頷いてきた。

「俺はそれでいい。真理、御前はどうかなんだ？」

「私もそれでいいわ。また今度ね」

「わかった。じゃあ俺もそれでいい」

変身を解いた葦原が言ってきた。

「津上、それでいいな」

「はい。その時は氷川さんも呼びましょう」

彼はそう葦原に返してきた。

「三人でお話します、その時は」

「じゃあこっちも三人出すか。また揃ったしな」

「そうだな。草加」

三原が俯いたままの草加にも声をかけてきた。

「それでいいな」

「ああ」

草加は俯いたままそれに頷いてみせた。

「それでいい。別に構わない」

「よし、こっちはそれでいい」

話を纏めた乾が津上と葦原に述べてきた。

「明日にでも。何処かで話をしよう」

「わかりました、じゃあまた明日」
「ああ、またな」

こうして津上と葦原は去った。しかしまだ問題は残っていた。木場達であった。

「木場さん、あのね」

「結花、君も生き返っていたのか」

「ええ。ロブスターオルフェノクに殺されたけれど」

「何っ」

木場はそれを聞いて思わず声をあげた。顔も驚きのものになっていた。

「今何で。君は人間に殺されたんじゃない」

「違います。私は影山冴子に」

「そんな、じゃあ今まで俺は」

「言いにくいけれどな、木場よ」

海堂が彼に言ってきた。首を横に振りながら。

「御前、騙されていたんだよ、あいつ等に」

「そんな、じゃあ俺はあの時」

「ラッキーグローバーの連中がどんな奴等かはわかっていただろう？」

「けれど」

「けれどもどうしたもないんだよ。御前は利用されていただけなんだ」

海堂はじつと木場を見ていた。咎めるわけではないが彼から目を離しはしない。

「オルフェノク、いやスマートブレインにな」

「木場さん、人間も同じなんですよ」

長田がここで彼に言う。

「汚いです。私もずっと虐められてきましたし」

「それは知っているけれど」

「御前、俺の仇取ってくれたのな」

今度は海堂が代わって木場にあの時のことを言った。海堂の夢を奪った彼の師であった男を倒した時のことだ。

「あいつはオルフェノクだったな」

「ああ」

「けれど人間だったんだ、心はな」

「心は」

「そういうとき。何か俺はやつとわかってきたんだよ」

顔を俯けさせて言うのであった。今は木場から目を離している。

木場は自然に顔を俯けさせてしまっていた。そうして話を聞いているのだ。

「人間もな、オルフェノクも変わりやしねえ。けれど俺は人間として戦うぜ」

「海堂……」

「私事です」

長田も言ってきた。

「啓太郎さんがいるから。だから」

「そうなのか」

「御前はどうするんだ？」

ここで海堂は顔を上げてまた木場を見てきた。そのうえで彼に問う。

「またオルフェノクにつくか？どうするんだ？」

「いや、少なくとも俺はもうスマートブレインには戻らない」

彼は顔を左下に向けてこう言った。辛い顔になっていた。

「結花を殺した奴等のところには」

「じゃあまた私達と一緒に」

「それは待ってくれ」

しかし二人の誘いを素直には受けなかった。受けられなかった。

「今は……考えさせてくれ。けれど」

「けれど？」

「少なくとも君達と戦うことはないから」

「そうですね」

「そうだ。だから今は」

彼はさらに言う。

「一人にさせてくれ。頼む」

「ああ、わかった」

海堂はこくりと頷いてそれを受けた。

「けれど、待ってるからな」

「私も」

「有り難う」

木場はその場から姿を消した。海堂もまた。長田だけが啓太郎のところに行って来ていた。そして彼の前にこくりと微笑んできたのであった。

第九章 啓太郎

「人間もな、オルフェノクも変わりやしねえ。けれど俺は人間として戦うぜ」

「海堂……」

「私もです」

長田も言ってきた。

「啓太郎さんがいるから。だから」

「そうなのか」

「御前はどうするんだ？」

ここで海堂は顔を上げてまた木場を見てきた。そのうえで彼に問う。

「またオルフェノクにつくか？どうするんだ？」

「いや、少なくとも俺はもうスマートブレインには戻らない」

彼は顔を左下に向けてこう言った。辛い顔になっていた。

「結花を殺した奴等のところには」

「じゃあまた私達と一緒に」

「それは待つてくれ」

しかし二人の誘いを素直には受けなかった。受けられなかった。

「今は……考えさせてくれ。けれど」

「けれど？」

「少なくとも君達と戦うことはないから」

「そうですか」

「そうだ。だから今は」

彼はさらに言う。

「一人にさせてくれ。頼む」

「ああ、わかった」

海堂はこくりと頷いてそれを受けた。

「けれど、待つてるからな」

「私も」

「有り難う」

木場はその場から姿を消した。海堂もまた。長田だけが啓太郎のところへやって来ていた。そして彼の前にこりと微笑んできたのであった。

「生きていたんですね、結花さん」

「はい、復活ですけれど」

長田は笑みを浮かべて彼にこう返した。

「それである時の約束ですけれど」

「は、はい」

啓太郎は直立不動になって彼女に応える。

「明日、いいですか。よかったら」

「ええ。じゃあ」

「明日。また携帯でお知らせしますんで」

「はい！」

「楽しみにしています」

長田は笑顔で最後にこう言ってその場を後にした。彼女は啓太郎のことを忘れてはいなかったのであった。そして啓太郎もまた。

しかし草加は俯いたままであった。彼は津上達の話の聞くとは言ってもまだ納得できないものがあつた。それは自分自身に対してであつた。

「草加」

「乾か」

彼が声をかけてくるとそちらに顔を上げてきた。そして言う。

「お笑いかな。俺もオルフェノクになっちまった」

「ああ」

「君を化け物と言つたけれどな。俺も化け物になった」

自分で自分を嘲笑う感じであつた。

「君が狼で俺が鮫だ。何の因果なんだか」

「けれど御前今は自分で考えているだろ？」

「何？」

「それを考えているのは御前自身じゃないのか？」

乾はそう草加に言う。声にはあえて感情を込めていないようであった。

「詳しいことはあの人達の話聞いてからだだが御前は姿はオルフェノクでも考えている心は人間なんだろう？じゃあ」

「君みたいに人間として、カイザとして戦えつてことかな」

「俺はそう思う。御前がどう考えるかわからないがな」

「どっちにしろだ」

彼は言った。

「俺はスマートブレインとは手を組まない。あいつ等だけは倒す」

「じゃあ草加さんも」

「そうだ、前と同じだ」

啓太郎にも言う。

「俺は奴等と戦う。それだけだ」

「そうか」

「ああ」

オルフェノクになったとしてもそれは変わらなかった。草加は今それをはっきりと言うのであった。こうして彼も戦いの中に戻ることとなった。

戦士達が集まる。その中で啓太郎と長田はデートをすることになった。

「お待たせしました」

「いや、どうも」

啓太郎は笑顔で着飾った長田と待ち合わせの木の下で合っていた。にこりと笑う彼女を見てやけに嬉しそうである。

「やっと約束果たせますね」

「そうですね。もう駄目かと思っていました」

啓太郎はでれでれとした顔で述べる。

「まさか結花さんと一緒にまた歩けるなんて」

「私もです。啓太郎さんと一緒になんて」

結花はにこりと笑って自分の右手を啓太郎の左手に絡ませてきた。仲のいい感じであった。それがはつきりとわかる

第十章 ラッキীগローバーその一

長田の服は彼女によく似合う白いコートとセーター、それにクリム色のロングスカートであった。彼女はこうした服装がよく似合うのであった。

その服で啓太郎と並んで歩く。そして歩きはじめた。

「今まで色々とありましたよね」

「そうですね」

長田は啓太郎の言葉に頷いた。

「昨日は特に。あの、木場さんですけど」

「木場さんなら大丈夫です」

長田は沿う啓太郎に返す。

「大丈夫なんですか？」

「はい」

「本当ですかね」

啓太郎はそれを聞いても半信半疑であった。どうにも首を傾げてしまっている。

「木場さんも随分悩んで一回死んだり。何かとありましたから」

「ええ。けれど木場さんはわかっていますから」

長田はまた言う。

「人間のことが。だから」

顔は少し俯いていた。それでも言葉ははっきりとしていた。

「戻ってきます。嘘は言わない人ですし」

「そうですね。あの人は純真過ぎるから」

「ええ。そうですね」

啓太郎のその言葉に頷く。

「だからああして。私のことでも」

「これからどうします？」

啓太郎はそう長田に問うてきた。

「これからって?」

「いえ、結花さんは。どうしますか?」

「私は同じです」

それが長田の答えであった。それは変わりはしなかった。

「人間として。生きます」

「そうですか」

「はい。だから啓太郎さんともこうして」

そして啓太郎に顔を向けてきた。

「一緒に」

「じゃあこれからもこうして」

「はい、一緒に」

二人はにこやかにデートを楽しんでいた。その間に二人はある男とすれ違った。だがお互いそれには気付かなかった。

「随分リキついたじゃねえか」

「は、はい」

眼鏡をかけた男が随分いかつい感じの男に引き摺られていた。琢磨逸郎であった。かつてはセンチピードオルフェノクとしてラッキグロバーの一員でもあった男だ。しかし長田も琢磨もお互いには気付かなかったのだ。そしていかつい男と話をしていた。

「いいか、何か自分を嫌う奴がいるだろ」

「はあ」

琢磨は男の話を聞いている。聞くだけであった。

「それがいいんだよ、面白いだろ」

「面白いですか?」

「嫌われるのも人間は華なんだ」

随分独自の論理を展開している。かなり偽悪者な人物のようだ。

「わかったな」

「何かはじめて聞きました」

「そつだろ、俺の持論だからな」

胸を張って語っている。

「わかったか。それでだ」
「ええ」

琢磨は彼の言葉に頷くだけであった。どうにもこの男にも勝てないものを感じていた。人間でしかないのに妙だとは思いつながら。

「河豚食いに行くぞ」

「河豚、ですか」

「そうだ、いいな」

「わかりました」

そんな話をしながら琢磨は消えていった。長田と啓太郎はそれに気付くことなくそのまま道を進む。二人は喫茶店や遊園地で二人きりの時間を過ごした。気付いた時にはもう夜になってしまっていた。二人は駅前の道を並んで歩いてそこから二人で川辺の道を歩いていた。

第十一章 ラッキーグローバーその二

「これからどうします?」

「啓太郎さんのお家に行つていいですか?」

「俺の家ですか」

「はい、そこでまた楽しくやりましょう」

「にこりと笑つてこう提案する。」

「どうですか?」

「いいですね、それ」

啓太郎としては断る理由はなかった。笑顔で頷く。

「それじゃあそれで」

「はい。コンビニでビールでも買って」

そんなよくある話をしていた。だがそこで目の前に一人の青年が姿を現わしたのであった。

「生きていたんだ。影山さんにやつつけられたって聞いたのに」

「貴方こそ。死んだ筈なのに」

「生き返らせてもらったんだ。王様にね」

「王様!？」

「オルフェノクの王だよ。照夫君に潜んでいた」

「そんな、あの子が」

それは長田にとつては衝撃的なことであつた。その話を聞いて思わず息を飲む。

「オルフェノクの王に」

「うん、けれど王はあの時たつ君達に倒された筈だったのに」

「それが生きていたの。影山さんのおかげでね」

「そうか、そういえばあの女いなかった」

啓太郎は北崎のその言葉で気付いた。影山冴子ことロブスターオルフェノクは生きていたのである。そう、彼女は最後の戦いでも姿を消していた。それに気付いたのであつた。

「だからか」

「生き返ったのは僕だけじゃないよ」
北崎は言う。

「他の皆だって」

「まさか」

「そうさ」

澤田亜季が北崎の右手から出て来た。

「僕だってね」

「くっ」

「そして俺もだ」

左手からジェイが。ラッキীগロバーの面々であった。

「三人だよ。さあ、どうするんだい」

「啓太郎さん」

長田は啓太郎の前に出て来た。

「ここは私が。だから」

「待って、君だけじゃとても相手には」

「けれど」

「海堂さん呼ぶから。いや、たっ君達も」

啓太郎は慌てて携帯に電話する。そしてすぐに人を呼ぶ。

「海堂さんですか？はい、ラッキীগロバーが。その」

「死んだだろ、あいつ等」

「それが生き返ってるんですよ、だから」

「わかった、すぐ行く」

海堂はそれに頷いた。そしてすぐに乾達にも電話をかける。

その間にもラッキীগロバーは近付いてくる。遂には影山冴子まで姿を現わした。

「お久し振り」

「貴女まで」

長田は彼を見据えて言う。

「私は最初から生きていたのよ。わかるかしら」

「ええ。それにそんなことはどうでもいいわ」

長田は構えを取りながら応える。

「貴女は私が」

顔が変わっていく。オルフェノク、クレインオルフェノクになっていく。そうすると影山もロブスターオルフェノクになった。

他の者達もオルフェノクになっていく。四人で長田を取り囲むのであった。

「啓太郎さんは早く」

「何言ってるんですか」

しかし啓太郎はその場に残ろうとする。

「結花さんを置いては。俺だっで一緒です」

「啓太郎さん……」

「だから一緒に」

「はい、わかりました」

啓太郎のその心に打たれた。頷く。だがその間にドラゴノルフエノクがやって来ていた。

「一人で僕達の相手になると思ってるの？ましてやこの僕と」

「そんなことは関係ないわ。だから」

「じゃあ。一撃で天国に送ってあげるよ」

「待って」

しかしドラゴノルフエノクの前にロブスターオルフェノクが出て来た。それから彼に言う。

「この娘の相手は私よ」

「影山さん」

「いいわね。それにもう他の獲物が来るわよ」

「獲物？あつ、本当だ」

まずは海堂がそこに到着した。バイクで慌てて来た感じであった。

「何だつちゆうんだ。まさかラッキーグローバー勢揃いだなんて」

「元気そうね、海堂君」

「御前に言われても嬉しくはねえんだよ」

海堂はそう影山に返す。

「なら俺も行くぜ。啓太郎、乾達は呼んだか？」

「う、うん」

啓太郎は彼の言葉に頷く。

「もうすぐ三人来るだろうけれど」

「そうか。なら時間稼ぎだ。しかしよお」

「何ですか？」

「こんなのねえだろ。四人もなんてよ」

「あら、四人とは言っていないわよ」

「何っ!？」

海堂は影山のその言葉に顔を向けてきた。

「今何だった？」

「ふふふ、それももうすぐわかるわ」

「海堂さん、それより今は」

長田が言う。

「何とかしないと」

「そうだな。早く来てくれよ」

そう祈る。その頃乾達は津上達と遅くまで話をしていたのであった。

第十二章 アギトとオルフェノクその一

乾達は津上達の話の話を聞く側に回っていた。氷川まで入れて三人になつていた彼等の話を聞く。それは彼等にとっては信じられないものであつた。

あかつき号事件、アンノウン、アギトへの覚醒、警察の対処、不完全な覚醒、そして黒衣の青年。全て乾達には信じられない、しかし同時に妙に納得できるものであつた。同時にオルフェノクことは乾達が話したがそれも理解された。だがここで王が復活する危険性も話された。これは乾達がまだ生きていることと草加のオルフェノク化で納得された。そのうえで話が続けられたのである。

「そんなことがあつたのか」

「はい、貴方達も色々あつたようですね」

「否定はしない」

草加が津上に返した。

「お互いにな。何かと見てきたな」

「そうだな」

葦原が草加のその言葉に頷く。

「そして戦つてきた」

「あの黒衣の青年があんた達と戦っていたのはな」

「意外でしたか？」

「それはな」

草加は今度は氷川に答えた。草加は腕を組んでいる。

「俺を生き返らせてくれらからな」

「俺も一度蘇生されている」

葦原は言つ。

「あの青年は俺達の造物主にあたるらしい」

「じゃあ神様か何か」

「そうですね。そう言えばわかり易いかと」

氷川が三原に答える。

「その神が今度は何を俺達にさせるのか」

「悪いことではないのは間違いないですよ」

津上が乾にそう返す。

「何でそう言えるんだ？あいつは一度俺達を滅ぼそうとしたんだろ？」

「それでもです」

津上はまた乾に言う。

「彼はわかってくれたんです。人もアギトも」

「そうなのか」

「しかしそのアギトっていうのは」

今度は三原が口を開く。

「いや、むしろギルスかな。何かオルフェノクに近いね」

「そうだな」

彼の言葉に乾が頷く。

「何でだ？急激な進化といい」

「多分アギト、ギルスとオルフェノクは似ている存在なんだ」

葦原が答える。

「ただ、創った者は違うな」

「黒衣の青年じゃないのか、あの」

「違いますね、おそらくは」

氷川が草加にそう返す。

「むしろ邪悪な意思を感じます」

「邪悪な意思」

それを聞いた乾、草加、三原の顔が強張る。対する三人の顔も同じものになっていた。彼等はそこに共通する何かを感じていたのだ。

「実はですね」

氷川は言う。

「アンノウンやオルフェノクに似た事件が他に起こっているのです」

「そうなのか！？いや、あれか」

三原はすぐに気付いた。

「あの未確認生命体か」

「はい、そうです」

三原に答える。

「それです」

「そういえば渋谷に隕石も落ちていたな」

草加はまた呟く。

「あと何か都市伝説で仮面ライダーか。色々あるかな」

「俺達もそこに混ざっているかも知れない」

葦原は呟く。

「若しかしてだけれどな」

「何か一つのものを感じないわけにはいかないのです」

氷川はまた言う。

「一つか」

「はい、その一つは何かまではわかりませんが」

「オルフェノクの王だけじゃない？」

草加が呟いた。

「で、そこにいるのは黒衣の青年やスマートレディと対立している」

「何だ、そいつは」

三原は眉を顰めさせて呟く。

「どんな奴なんだ」

「そこまではわからないです。けれど」

津上は述べる。

「相当な力の持ち主でしょうね。神みたいだな」

「神、か」

草加はそれを聞いてふと口元にシニカルな笑みを浮かべて言うてきた。

「むしろ邪神、いや悪魔じゃないかな、それは」

「悪魔！？まさか」

乾はそれを否定しようとした。だが否定できなかった。

「いや、あのオルフェノクの王の後ろにいるとなると」

「そうだな。それだけの存在だ」

彼と共に王と戦った三原も言う。

「それは間違いない」

「だからです」

氷川がここで三人に声をかける。

「私達は貴方達と共に戦います」

「そしてオルフェノクの王を倒しましょう」

「協力させてもらおう」

葦原と津上も述べた。乾がそれに応える。

「わかった。あいつが復活しているのなら」

乾が言う。

「一緒に倒そう。草加、三原、それでいいな」

「味方が多いに越したことはない」

草加の答えはこうであった。

「敵が強いならな」

「言葉は悪いがその通りだ」

三原も同じ考えだった。

「あんた達の協力を歓迎するよ。じゃあ」

「はい、宜しくです」

津上が挨拶をする。こうして彼等の協力体制が出来上がった。店の外はもう夜になっていてそこで帰ろうとする。だがその時だった。

第十三章 アギトとオルフェノクその二

「!?!」

乾の携帯のベルが鳴った。着信を見ると啓太郎のものであった。彼は立ち上がるうとしたところで動きを止めて啓太郎に問うのであった。

「啓太郎、どうした？」

「たっ君、大変なんだよ！」

彼は電話に出るなりそう叫んできた。

「大変だつて!?!」

「うん、ラッキーグローバーが出て来たんだ。それも全員！」

「何!?!」

「結花さんが今いて海堂さんも呼んだけれどとても無理だから。だから」

「わかった、すぐに行く。場所は？」

「川辺の道。すぐ来て」

「よし」

乾はそれに頷く。すぐに電話を切つてそこにいる面々に言った。

「オルフェノクだ」

「ああ、聞いた」

三原がそれに応える。

「行くか、すぐに」

「いいな、草加」

「ああ、俺の考えは変わらない」

草加はすぐに乾に答えた。

「オルフェノクになつてもな。オルフェノクは倒す、それだけだ」

「そうか」

「そついうことだ」

「よし、じゃああんた達は」

乾は今度は津上達に声をかけた。

「俺は貴方達と一緒に」

「俺もな」

津上と葦原はそう述べてきた。

「僕はちよつと。変身してきます」

「変身!？」

「ああ、氷川さんはちよつと特別なんです」

津上が三人に説明する。

「警察が開発したライダーで。チームで装着して戦うんですよ」

「そうだったのか」

「はい。すぐ行きますから」

そう五人に述べる。

「じゃあ」

氷川は一足早く店を出た。五人はそれを見送ってからそれぞれのバイクに乗り込む。

「しかしラッキーグローバーとはな」

「それだけじゃないんじゃないかな」

草加が三原に言う。

「というと」

「他にも出て来る可能性があるってことさ」

「他の奴等もか。これは最初からかなり派手な戦いになるな」

「何、覚悟のうえです」

津上が乾にそう返す。

「ずっとそうした戦いだっただんですよね?それはこっちもです」

「そうか、じゃあ頼りにさせてもらっぞ」

「はい」

「任せてくれ。少なくとも足手纏いにはならない」

最後に葦原が言う。五人はそのままそれぞれのバイクで川辺に向かった。

第十四章 サイガその一

川辺では長田、海堂がラッキークローバーと戦っている。二人で四人を相手にしているがそのわりには健闘していると言えた。

「へえ、思ったよりしぶといね」

ドラゴンオルフェノクの姿の北崎が息を荒くしながらも立っている二人を見て言う。

「やるじゃない」

「予想通りね」

影山はそんな北崎とは对象的に冷徹にこう評してきた。

「二人共實力はわかつているわ。けれどだからこそ」

彼女はここでさらに言う。

「もうそろそろ限界じゃないかしら。私達四人を相手にしてだと」

「甘く見るなつちゆうんだよ」

海堂がそれに言い返す。左肩を押さえているがそれでもまだ立っている。

「御前等位俺一人でもな」

「海堂さん無理しないで」

しかしそんな彼を長田が注意する。

「相手はラッキークローバーよ。だから」

「その通りだ」

ジエイがそれに応えて述べる。

「その俺達四人相手によくやった」

「しかしそれも限界だ」

澤田がゆつくりと前に出て来た。

「死んでもらう」

「まずは二人ね」

影山が笑った時だった。彼等の右手にある土手の上の道に三人のライダーが姿を現わした。

「なっ、乾巧、三原修二」

影山が彼等を見て言う。

「ここに来たのね」

「奴等だけじゃないよ」

北崎がそれに訂正を入れた。

「ほら、あのカイザも」

「草加雅人。生き返っていたのね」

「そういうことだ。君達も随分と生き返っているようだな」

「そうさ。君達を倒す為にな」

澤田がそれに返す。

「来い。君達の相手もしてやる」

「いらっしやい、坊や達」

「言われなくても。行くぞ！」

「ああ」

「わかった！」

草加と三原は乾のその言葉にそれぞれ答えた。同時にフォンを出す。

番号を入力する。

「スタンドバイ」

それから乾は右手を高く掲げ草加は右手で持っているのを見せる。

三原は直接右の腰に入れる。

「変身！」

「コンプリート」

電子音と共に赤、黄色、青の三つの光がそれぞれ輝く。三人はそのままファイズ、カイザ、デルタの三人のライダーに変身したのであった。

「乾」

草加が右手を首にやりながら乾に声をかけた。乾は右手をスナッ
プさせている。

「俺があのだらごんをやる。いいな」

「わかった」

「三原、君は澤田をやれ」

「それでいいんだな」

「ああ。君達」

草加は今度は海堂と長田に声をかけた。

「まだやれるんならいいが」

「おい、冗談言っんじゃねえよ」

海堂が偽悪的にそれに返してきた

「まだまだやれるっちゅうんだよ」

「私だつて。まだ」

「そうか、悪いがフォローはできない」

「必要ないぜ」

海堂はまた返す。

「俺はジエイをやる」

「私は」

長田の相手は決まっていた。きっと影山を見据える。

「一人しかないわ」

「あら、お嬢ちゃんなのね」

「そうよ。あの時の借り」

声が怒りで燃えていた。普段の長田とは全く違っている。

「返させてもらうわ」

「いいわ。じゃあ相手をしてあげるわ」

「そして俺達だけじゃない」

乾はここで影山に言った。

「何が？」

「見ろ」

ラッキীগローバーから見て前を指差す。そこに二人のライダー

が来ていた。

「変身！」

葦原はバイクに乗りながら変身する。葦原の姿とエクシードギル

スの姿を重ね合わせエクシードギルスになって彼等の前にやって来た。

「なっ、別のライダーも」

「俺もいます！」

津上は既にバイクから降りていた。彼もまた変身に入る。

第十五章 サイガその二

左腰辺りで両腕をクロスさせ右腕を前へ伸す。それから伸ばした右腕を引き寄せる。流れるような動きであった。

腰にベルトが出て来る。その間に右腕をゆっくり前方へ伸ばす。その姿勢のまま言う。

「変身！」

叫ぶと同時に光に包まれた。こうして彼はアギトとなったのであった。

これで二人。しかしまだライダーはいた。

機械のライダーが姿を現わした。G3Xである。これで三人のライダーが揃った。

「いいわね、役者が揃って」

ロボスターオルフェノクは彼等を見ても何も動じてはいなかった。彼等を前にしても悠然と笑っている。

「じゃあこちらは」

「何っ!？」

乾は影山のその声を聞いて声をあげる。

「そうよ。こっちにも切り札があるのよ」

「切り札だと!？」

津上がそれを聞いて影山を見据える。

「そうよ。レオ君」

影山が名前を言うのとラッキークローバーの後ろから一人の若い男が姿を現わした。筋骨隆々とした逞しい身体の美男子であった。

「誰だ、こいつは」

「いや、俺も知らない」

乾が葦原に答える。

「はじめて見る奴だ」

「どっちにしるオルフェノクなのは間違いない」

「そうよ。わかるのね、やっぱり」

影山は草加の言葉に頷いてきた。

「君達の仲間でそれ以外にあるのかな」

「ふふふ。確かにね」

「しかしそれだけじゃないんだよ」

北崎が笑ってきた。

「彼は僕達とは違うまた特別な存在なんだから」

「どういうことだ、一体」

「レオ君、見せてあげて」

「ワカツタヨ、ミス影山」

訛りの強い日本語で返す。どうやら日本人ではないらしい。

「何者ですか、この人は」

「氷川さん、そんな悠長なこと言ってる場合じゃないですよ」

津上が氷川に言う。

「こいつ、かなり」

「はい、わかっています」

氷川は言葉は的外れであったが動きは違っていた。既に構えを取っている。

レオはゆっくりと前に出て来た。右手に携帯を持っていた。

「むっ!?!」

「まさかあれは」

「そう、そのまさかよ」

影山は草加と三原に言う。

「帝王のベルトで培われた二本のベルトのうちの一つ」

「何っ!?!」

「帝王のベルトですって!?!」

今度は海堂と長田が声をあげた。

「おい、そんなの聞いてねえぞ」

「何なの、それは」

「ベルトは二本だけじゃなかったってことさ」

澤田が声をあげる。

「デルタのベルトの技術を応用して開発した上の上のベルトなのですよ」

「今度は貴様か！」

乾はその声を聞いて声がした方を睨み据えた。

「はっはっは、その通りなのですよ」

また一人出て来た。何と村上峽児であった。彼もまた蘇っていたのであった。

「私もまた王に蘇らせて頂いたのですよ。その偉大なる力でね」

「人間の姿も受けてか」

「その通りです」

乾にまた答える。同時に彼の方を見上げてきた。

「オルフェノクの世界の為に蘇ったのですよ」

「くっ……」

「さあレオ」

彼もまたレオに声をかける。

「見せるのです、御前の力を」

「了解」

レオはそれに応える。携帯の番号を入れて一旦上に回転させて投げる。それから言う。

「変身」

「コンプリート」

腰に携帯を入れると青白い光が数条レオの身体を覆った。力を溜める動作でそれを受ける彼は今白いライダーに変身した。

「ライダーだと!？」

「仮面ライダーサイガ」

レオは自分から名乗ってきた。

「コレガ帝王ノベルトノーツ天ノベルト」

「天のベルト！」

「ソウダ。コノカデ御前達ヲ倒ス」

「なら御前の相手は俺だ！」

乾が名乗りをあげてきた。そして彼に向かって飛び降りた。

「おい、三原」

草加はそれを見て三原に声をかける。

「さっきの言葉通りだ、俺はあのドラゴンオルフェノクをやる」

「わかった」

既に海堂はジエイに、長田は影山に向かっていった。彼は澤田に向かっていった。

「ふふふ、戦いがはじまりましたね」

村上はその様子を見て楽しそうに延べる。

「では私の相手は」

ここでアギト、津上翔一を見る。

「君が相手になりますか？」

「お望みとあらば」

津上はそれに応えて身構えてきた。

「相手に」

「おい、待て」

村上に向かおうとした津上に乾が声をかける。彼は既にレオと対峙していた。

第十六章 人とアギトその一

「そいつは手強いぞ」

「なら僕も」

「俺も行く」

それを聞いた氷川と葦原も前が出る。だがそこに二人の男が姿を現わした。

「むっ!？」

「氷川君」

ここで小沢から通信が入ってきた。

「どうしたんですか？」

「危ないわ、今そこに六人のオルフェノクがいるわね」

「はい」

「彼等だけじゃないわ。他にもいるわ」

「そうなんですか!？」

「ええ、後二人」

そう言ったところで村上の左右から二人の男が現われた。二人は顔を豹変させすぐにスクイッドオルフェノクとバットオルフェノクになったのであった。

「くっ、二人も!」

津上がそれを聞いて声をあげる。

「私の忠実な同志達ですよ。さあ君達」

村上は彼等に声をかける。酷薄な笑みと共に。

「彼等の相手をしてあげなさい」

二人のオルフェノクは無言でそれに頷く。そして二人に向かう。

「チッ、なら」

まず前に出たのは葦原であった。

「仕方ないですね」

氷川も前が出る。葦原はバットオルフェノクと、氷川はスクイッ

ドルフェノクと戦いはじめた。

「さて、これで一対一となりましたね」

村上は酷薄な顔のまま津上を見据えてきた。

「では私もまた」

姿が急に変わっていく。そしてローズドルフェノクになったのであった。

津上と対峙する。彼はドルフェノクになっても笑っていた。

「さあアギトの戦士よ」

「俺を知っている!?」

「勿論ですよ。貴方もまた私達とは違う存在なのですからね」

「違う!」

津上は村上のその言葉を否定する。

「俺は人間だ!アギトの力を持っていても人間だ!」

「人間ですか」

「そうだ!だから俺は!」

そのまま突き進む。そして村上に拳を向ける。

「ならば私も見せましょう。ドルフェノクの素晴らしさ、人間の弱さを」

薔薇を放つ。その赤い死が津上を襲う。

「うわっ!」

「母は、それだけではありませんよ!」

村上は動きを止めた津上にさらに襲い掛かる。そのまま拳で彼を撃つ。

「うわっ!」

「どうしました!?その程度ですか?」

村上は彼を撃つた後でさらに襲い掛かる。容赦ない拳を浴びせていく。

「やはり人間は弱いのですよ。ですから他の者を認められない」

「違う!」

しかし津上はそれに反論する。反論すると共に態勢を立て直す。

「人は弱くはない！そして他の者も受け入れられる！」

「ならば見せてみるのです」

村上はそんな彼に言う。

「その人間の強さを」

「やってやる！」

叫びながら村上に向かう。彼も負けるつもりはなかった。

「御前が人間を否定するなら俺はその人間を肯定する！」

言った後で蹴りを放つ。ソバットだ。それが村上の左を襲つ。

しかし村上はそれを左手で受け止める。そのうえで言うのであつた。

「ほう、見事です。どうやら貴方は私と戦う資格があるようですね」

「俺は負けるわけにはいかない！」

津上はまた言う。

「人の今の為に！」

彼等の戦いは激化していた。その横では氷川と葦原がそれぞれの相手と死闘を繰り広げていた。葦原の爪がバットオルフェノクを襲う。

「うおおおおおおおっ！」

野獣そのものの動きでバットオルフェノクを引き裂こうとする。

空を飛んでも跳躍で追いつく。そのまま空中戦に持ち込む。

「氷川君」

小沢が氷川に通信を入れていた。

「いい？オルフェノクの動きだけけど」

「はい」

「アンノウンのパターンと酷似しているわ」

「そうなんですか」

「ええ。だからね」

そう述べたうえでまた言葉を続ける。

「落ち着いて行って。むしろ」

「むしろ？」

「オルフェノクの動きは人に似ているわ」
「人に」

そこにスクイッドオルフェノクの墨が来た。しかし彼はそれを右に身体を捻ってかわす。

「どう？似てるでしょ」

「はい、確かに」

「そういうことよ。だから慣れていればある程度はわかるわ」

「アンノウンに似ているけれど人間の頭で動く」

「わかったわね」

ここに氷川の答えがあつた。彼は小沢のその言葉を受けて戦いを進めていくのであつた。

長田は影山と、海堂はジエイとの戦いであつた。だが彼等の苦戦もかなりのものであつた。

「うっ！」

「くっ！」

二人共相手の拳にそれぞれ吹き飛ばされる。そしてもんどりうって倒れてしまった。

「あら、その程度なの？」

影山が倒れ込む長田にこつ声をかけてきた。

「威勢がいいと思つたら」

「まだ……」

長田はうつ伏せになっていたが何とか両手で起き上がる。海堂もであつた。

第十七章 人とアギトその二

「こんなことで。私は」

「結花、ちと辛いんじゃないかねえのか」

海堂は膝で何とか立ち上がりながら長田に声をかけてきた。顔はじつとジエイを見据えている。

「やっぱりラツキーグローバーはよ」

「じゃあ海堂さんだけ帰ったらどうですか？」

長田はあえて普段の調子で彼に言ってきた。

「相手が相手ですから誰も何も言いませんよ」

「冗談言っちなっちゅうんだ」

しかし彼はそう長田に返した。

「強い相手倒したらそれで勲章になるだろ？」

「じゃあ帰らないんですね」

「当たり前だ。ここまで来たらな」

完全に立ち上がって述べる。

「やるぜ」

「はい」

その横では三原が何とか澤田と戦っている。押されながらも持ち堪えていた。

「まだ倒れないのか」

「この程度で！」

三原は何度倒されても起き上がる。そして澤田に立ち向かう。

「俺は負けないんだ！」

「面白い。じゃあ最後まで相手してやる」

澤田もそんな三原に正面から向かってきた。

「覚悟するんだな」

二人の戦いも続く。草加は北崎と戦っている。剣を逆手にその禍々しい牙に似た腕と対峙していた。

「へえ、強くなったんじゃない？」

北崎は幾度も草加と攻撃を交え合いながら楽しそうに述べてきた。

「この感じ。僕達と同じかな」

「だったらどうするのかな」

草加も北崎の攻撃を受け続けかなりのダメージを受けている。しかしそれでも立って彼に向かってきていた。

「生憎俺はどうなるかと貴様等は倒す」

「いいねえ、それ」

北崎は草加のその言葉を聞いて笑う。

「楽しいよ。やっぱりそうでなくちゃ」

「特に貴様には借りがある」

草加は北崎を見据える。

「俺自身のな。今までの借りが」

「じゃあ僕を倒すってこと？」

「そうだ」

カイザの目が怒っているように見えた。爛々と輝いてさえた。

「生き返ったなら。貴様だけは！」

カイザブレイガンをやはり逆手に持ち突き進む。激しい衝撃が彼を襲うがそれでも引かなかった。

「おおおおおっ！」

そのまま北崎ともつれ合う。今カイザはその全ての力を出していた。

乾は目の前にレオを見ていた。サイガはその手にトンファーを持っている。

「来イ」

レオは左手で首を掻き切る動作をして乾を挑発する。

「相手二ナツテヤル」

「言われなくてもな」

乾はそんな彼を前にしても冷静さをあえて維持させていた。

「俺は怖くとも何もないんだよ」

「ソウカ」

「そうさ。行くぜ！」

「ナラ」

向かって来た乾を見て動いてきた。両手に持つトンファーで襲い掛かる。

「むっ！」

「御前ノコトハワカッテイル。負けハシナイ」

「何だと！」

「俺ハオルフェノク最強ノ戦士。負けルコトハナイ」

彼は言う。

「ダカラ」

空を飛んだ。いや、浮かんだ。

そのまま乾へ突進して来る。体当たりとトンファーを受けて吹き飛ばされる。

「ぐわっ！」

吹き飛ばされ地面に叩き付けられる。しかし痛みには耐え何とか立ち上がる。

「まだだ」

乾は胸を抑えながら着地した彼を見据えていた。

「御前が空で来るのなら」

「ドウスルツモリダ？」

「俺にも考えがある」

携帯を取り出した。それで入力する。

「よしっ」

入力を終えてから会心の声を出す。そこにオートバジンが空を飛んでやって来た。

「ナッ」

「空を飛ぶのは御前だけじゃないんだ！」

乾は声をあげるレオに対して言う。

「オートバジン、行けっ！」

彼も陸から攻撃を仕掛ける。空と陸から同時に攻撃を浴びせるつもりであった。

「又、コレハ」

「さあ、こならどつする」

下から照準を合わせる。オートバジンと動きを合わせて潰すつもりであった。

第十八章 人とアギトその三

しかしそうは行かなかった。それより前にレオはさらに上に飛んでそのまま消え去ってしまったのであった。

「ちっ、逃げられたか」

「おやおや、早いですね」

村上はレオが撤収したのを見て楽しそうに声をあげた。

「では仕方がない。私も去りますか」

そう言つて津上に声をかけてきた。声には笑みがこもっていた。

「ではアギトの戦士よ、また」

「逃がすか！」

津上は追おうとする。そして追撃を仕掛けてきた。

その横では氷川と葦原が敵を倒そうとしていた。氷川はその攻撃の連打でスクイッドオルフェノクを倒してしまっていた。

「グオオオオオオッ！」

青白い炎を出して灰となり消えていく。その横では葦原がその脚で踵落としを決めてバットオルフェノクを倒していた。

「ギャオオオオオオ！」

叫んでいたのは葦原であった。攻撃を決めて絶叫していた。

バットオルフェノクも攻撃を決められ青白い炎を出す。そして彼もまた灰となつて消えてしまった。

「灰になる、か」

「話通りですね」

氷川が葦原に応える。

「オルフェノクは倒されて灰になる」

「ああ。やはりな」

葦原もその話はこちらに来るまでに聞いていた。だからこそ今日の前で起こっていたことを納得できたのであった。

「しかし今は」

「津上さん」

「おっと、三人になりますか」

村上は自分の部下達が倒されたのを見て驚くまでもなく楽しそうに声をあげた。

「面白そうですがもう勝負は一つ流れていますしね。私はこれで」
「待てっ！」

津上は村上を捉えようとする。だがそれより前に村上はまた薔薇を放ってきた。それが左右から襲い掛かるうとしていた氷川と葦原も包み込んだ。

「うわっ！」

「ちいっ！」

その薔薇の前に二人は動きを止められた。それは津上も同じであった。

「ははははは、アギトの戦士達よ」

村上は姿を消しながら彼等に対して声をかける。

「ではまた。お会いしましょう」

「くっ、待て！」

津上は村上に声をかける。だがそれは間に合わなかった。彼等は村上の高笑いを歯噛みして聞くしかなかった。

「あれ、村上さん帰っちゃったよ」

北崎はレオと村上が姿を消したのを見て言った。

「飽きちゃったのかな」

「今は潮時ね」

影山もそれに応える。彼等の前ではかなりのダメージを受け脚をふらつかせている草加と長田がいた。二人は何とか立っていたが最早立っていられるのが不思議な程であった。

「じゃあ御二人さん、またね」

影山が彼等に声をかける。その声は笑っていた。

「御機嫌よう」

「何か物足りなかったけれどまあいいや」

北崎も言つ。

「またね。それじゃあ」

「待て！」

草加がその北崎に追いつがるうとする。

「勝負はまだだ……くっ！」

しかし片膝をつく。やはり限界であった。

「草加、今は無理だ」

そこに乾が来る。戦えそうにない草加と長田の前に立つ。

「くそっ、こんなところで」

「折角あの女を前にしたのね」

「また会いましょう、長田ちゃん」

影山は長田を見下ろして笑っていた。それから悠然と姿を消したのであった。

北崎も消えていた。それを見てジェイも澤田も姿を消す。ラッキーグローバーも全員撤退したのであった。

戦場に残ったのは乾達であった。しかし彼等の受けた傷はかなり深いものであった。

草加と長田だけでなく海堂も三原もかなりのダメージを受けていた。特に三原はかなり派手にやられており手当てが必要な程であった。た。

「何てこった」

変身を解いた乾は傷ついた仲間達を見て呻くように言った。

「あれだけの連中が一気にやって来るなんてな」

「たっ君、大丈夫？」

そこに啓太郎が戻って来た。真理も一緒に来ていた。

「ああ、俺はいいが」

「長田さん」

長田に顔をやれば人間の姿に戻って何とか立っている有様であった。それでも彼を見てにこりと笑ってきた。

「大丈夫です、啓太郎さん」

「おい、そんな身体で大丈夫もねえだろうが」
彼女よりは幾分傷がましな海堂が言ってきた。彼も人間の姿になっ
ている。

「ほら、肩貸せ」

そして彼女に言う。

「連れて行ってやるからよ」

そう言っただけで彼女の肩を担いで何処かへ去る。そこへ津上達が戻っ
てきた。

「こっちはまた随分派手にやられたみたいだな」

葦原が言ってきた。

「大丈夫、とはいってないですね」

「いや、こっちもこれ位はいつものことだ」

変身を解いた草加が氷川にそう返す。何とかサイドバッシャーに
まで辿り着いていた。

「気にするな。何とかやっつけていける」

「その傷で、ですか」

「そこはあんた達と同じさ」

今度は津上に答えた。

「それに今の俺はオルフェノクになってるんでね。並の身体じゃな
いんでな」

「そうなんですか」

「それより三原だ」

草加は言った。

「大丈夫か？」

「ああ、何とか」

彼はふらふらになりながら変身を解いた。そのうえで応える。

「一人で帰られるから」

「そうですか。けれど一緒に帰らせてもらっていいですか？」

津上はそう提案してきた。

「まだオルフェノクが襲い掛かってくるかも知れないから」

「ああ、それならな」

乾が彼に応えてきた。

「頼めるか。こんな有様だからな」

「はい。じゃあ一緒に」

「あの洗濯屋までな」

彼等は深く傷つきながらもラツキーグローバーと村上、そしてレオとの戦いを終えた。彼等の強さの前にかなりのダメージを受けながらも何とか生き残った形であった。そのまま啓太郎の家に戻りそこで傷を癒すのであった。

第十九章 オーガ

その頃木場は長田のかつての家にいた。彼は家の中でホースオルフェノクになっていて周りには三人の屍が転がっていた。

それは長田の家族であった。彼女を虐げていた三人だった。彼等は今物言わぬ骸になって転がっていたのである。その前に彼は自分の叔父も殺している。

「せめて苦しめないように」

木場は彼等の骸を見下ろして呟いた。

「してあげたよ。結花もそこまでは望んではいないだろうからね」

骸は灰になっていく。それが消え去ると木場は家から姿を消した。そして人間の姿になり一人夜道を歩くのであった。

「これからどうしようか」

彼は一人になるとそう呟いた。

「海堂や結花はああ言ってくれているけれど」

それでも行くわけにはいかなかった。それにはあまりにも心にしがらみがあった。その為に彼はどうすることもできず今夜道を一人彷徨い歩いていたのである。

あてもなくあちこちを歩いている。その彼の前にスマートレディが姿を現わしてきた。

「お姉さん捜したのよ」

「また貴女か」

「そう。木場君が心配になってね」

笑ってこう述べてきた。

「それで来たの。それでね」

「ええ」

「ラッキীগローバーが全員復活したのよ」

「えっ」

木場はその言葉を聞き言葉を呑んだ。

「彼等が」

「そう。そして村上社長も蘇ったのよ」

スマートレディはさらに言葉を続ける。

「おまけにベルトも二本出来上がって。それで乾君達と派手にやり合ったわ」

「乾君達と」

「木場君のお友達もいたわよ」

彼女はさらに付け加えてきた。

「海堂、結花」

「皆無事だったけれど」

顎に拳を当てて俯いてみせる。

「大怪我しちゃって。それで大変なことになってるの」

「そうだったのか」

「それで木場君はどうするのかしら」

あらためて彼を見てきた。

「どっちについて戦うのかしら。それとも戦わないのかしら」

「少なくともオルフェノクにつく気にはなれない」

木場は俯いてこう言った。

「あいつ等には騙されていたし。それに結花を」

「そうよね。お姉さんその気持ちはわかるわ」

その言葉に頷いてみせる。

「じゃあ戦わないか戦うかよね」

「そのどちらかだけねど。まだどうするかは」

「後は自分で決めるといふのなら」

彼女はまた言った。

「やっぱり木場君に渡してあげる」

「何を」

「はい、これ」

彼女はここであるものを出してきた。それはベルトであった。

「ベルト、まさか」

「そう、二本のベルトを言ったわよね」
「うん、今」

「そのうちの一本。地のベルトよ」
そう木場に答えてきた。

「実はね、スマートブレイン社はデルタギアから二本のベルトを開発していたの。一本は天のベルト、サイガ。そしてもう一本が」

「この地のベルト」

「そう、オーガっていうのよ」

「オーガ……仮面ライダーオーガ」

木場は今その名を呟いた。手に取るベルトに確かに力を感じていた。

「その力を俺に」

「どうするかは木場君次第よ」

彼に預けると言ってきた。

「どう使うかは」

「何故それを俺に」

「木場君だからよ」

それがスマートレディの答えであった。

「それでいいかしら」

「俺を信じてくれる」

「少なくとも嫌いじゃないわ」

その大きな目で木場を見上げてきた。

「木場君なら何かしてくれるって。お姉さんこれでも期待しているのよ」

「俺が何かできる」

「してみる？」

「……暫く考えさせてくれ」

少し時間を置いてからこう述べてきた。

「俺はまだどうしていいかわからないから」

「そう。だったらじっくり考えて」

またしてもあえて木場に任せてきた。

「それじゃあね」

スマートレディは立ち去った。後には木場だけが残された。彼はまた一人になったのであった。

一人になった彼はじつとオーガのベルトを見ていた。そして考えていた。

「オーガ。天のベルト」

そのベルトを見てどうしようか考えていた。しかし今はどうしても結論を見出せないでいたのであった。彼はまだどうするべきか決められないでいた。

第二十章 バーグローバー

スマートブレインにはまた人が集まってきていた。影山のいるバーグローバーにもあの面々が集まってきていた。そこには村上もいた。

「ふふふ、皆さん久し振りですね」

「そうだな」

彼にジェイが応えてきた。

「特に俺はな」

「またお会いできて光栄です」

そうジェイに返す。

「貴方がいなくなつてから色々ありましたからね」

「結局琢磨君はいなくなつたままね」

影山がジェイにビールを出しながら述べてきた。

「今何処で何をしているのかしら」

「彼は彼で楽しんでるんだよ」

北崎が笑つてそう答えてきた。

「多分ね」

「つまりもうここには戻つて来ないつてことね」

「だと思つよ」

「ならそれはそれでいいわ」

影山はそれを受け入れた。

「澤田君がいるし。メンバーは揃っているから」

「そう、そして」

村上はここで自分の左をちらりと見てきた。

「彼もいますしね」

そこにはレオがいた。彼は朗らかだが同時に不敵な笑みを見せて

そこに座っていた。

「彼ね」

「はい」

レオを見た上で影山にも答える。

「ライオンオルフェノクなのですよ」

「だからレオなのね」

「ソウイウコト」

レオ自身が答えてきた。やはり癖のある日本語であった。

「俺サイガニナレル。コレデファイズモ倒ス」

「そう。じゃあ期待しているわレオ君」

「サンキュー、ミス影山」

その言葉に伝えてきた。そしてカクテルを注文する。

「スクリュードライバー」

「わかったわ」

影山はそれに頷く。その手でカクテルを作って出す。

「どうぞ」

「ウン」

「けれど中々賑やかになってきたわね」

「これだけではありませんよ」

村上是笑って彼女に言葉を返してきた。

「まだ誰かいるの？」

「はい」

不敵な笑みで応える。

「それも大勢。今相手は何人でしたっけ」

「何か新しいのも出たから八人だったね」

北崎がそれに答える。

「違ったっけ」

「木場君も生きているんじゃないかかったかしら」

影山はレオにスクリュードライバーを渡しながら答えていた。

「あれ、彼生きていたんだ」

「確かね」

「ふうん、けれどそれでも九人だよ」

「一人一人は相当な強さだな」

ジェイはクールに述べてきた。ビールを飲んでいるがあまり酔ってはいないようである。それは彼が酒に強いからであろうかそれとも酔えない理由があるのかはわからない。だが彼が酔っていないのは確かであった。最も冷静な様子を保っていたのであった。

「一騎当千か」

「合わせて九千」

澤田がそう返す。

「しかし俺達もいる」

「面白い勝負かしら」

「一騎当千、どう多く見ても九千ですか」

村上はそれを聞いて何故か笑う。

「上の上が九人いればそうでしょう。こちらは上の上は六人」

「あら、それを言われると数では負けているわよ」

影山は今度はそう答えた。

「王もいるけれど」

「何、王の手はわずらわせませんよ」

村上は自分の酒を飲みながら述べた。

「中の下でも数がいて上の上の戦術ならば問題ありません」

「言っている意味がわからないよ、それじゃあ」

北崎は詰まらなさそうに言う。

「もつとわかりやすくさあ。いかないの？」

「戦いの場は決まっています」

彼はまた言う。

「何処だ？」

「とっておきの場所です」

ジェイの問いに笑みを返す。

「奇巖山」

村上は言った。

「そこで戦います」

「奇巖山という」と

澤田はその記憶を手繰って呟いた。

「あの岩山か。高低が凄かったな」

「どうですか、そこで」

「いいわね」

影山はそれに賛成してきた。

「サイガの力も使えるし。何よりも雰囲気がいいわ」

「彼等の墓標としては上の上ですね」

「何ニシロ戦エル場所ナノハイイ」

レオも異存はないようであった。

「ファイズ、今度こそ倒す」

「僕は楽しいんなら何処でもいいよ」

北崎の願いはそれだけであった。他には何も考えてはいないし望んでもいないようである。

「それだけ」

「俺もだな」

ジエイはクールなまま言った。

「どちらにしるだ。ファイズ達を倒さなければならぬのならそれに適した場所がいい」

「俺も同じだ」

澤田は別に何処でもよかった。

「あいつ等の死に場所に相応しいのならな」

「ではこれで決まりね」

影山が話を纏めてきた。彼等の話はこれで決まった。

「奇巖山でね。いいわね」

「では今宵は我々の勝利に対して」

「乾杯だね」

北崎が村上の言葉に応える。こうしてスマートブレインはライダー達を迎え撃つ準備に入ったのであった。村上の目には秘策が宿っていた。

第二十一章 阿部里奈

スマートブレインが戦いの準備を進めている頃乾達は自分達の傷を癒していた。

オルフェノクになった者かその因子を持つ者達であるからその回復は早い。しかし彼等はその中で浮かない顔をしていたのであった。「ラッキーグローバーが全員復活か」

乾は啓太郎の家の中でソファーに身体を沈めていた。浮かない顔で呟いている。

「しかも新しいライダーまでいるとはな」

「最初に戻っただけだろ」

向かい側に座る草加がそれに返す。紅茶を飲みながら言う。

「そうじゃないかな」

「簡単に言ってくれるな、また」

海堂がそれを聞いて呆れたように言葉を返す。

「相手にするにはこの上なく厄介だろうが」

「そうですね」

彼の言葉に長田が頷く。

「相手は全部で六人。あの村上峽児もいて」

「他にもオルフェノクがいるな」

三原はそこに気付いた。

「王が復活しているのならそれだけでかなりの数だろうな」

「それに対してこちらは八人です」

氷川が述べてきた。彼等もソファーに座っている。乾と海堂、長田、津上が一方にいて草加、三原、氷川、葦原がもう一方にいる。

真理や啓太郎は少し離れた場所でそれぞれ椅子に座って話を聞いている。

「どれだけの数なら相手になるか」

「スマートブレインって大企業だったよな」

葦原がふと言う。

「そいつ等全員がオルフェノクだとしたら」

「絶望的、でもないですか」

津上はあえて笑って述べた。

「一万とかそんな数じゃないし」

「あるよね、多分」

「そうだろうね」

しかし真理と啓太郎がここで言う。

「スマートブレインもかなり数が減ったけれど」

「いるよね、まだそれだけ。それに復活したのとか」

「マジ!？」

「マジって御前」

乾が津上に突っ込みを入れる。

「そんなことも考えていなかったのか!？」

「いや、何て言うかそこまでは」

苦笑いを浮かべて乾の方を見てきた。

「やっぱり」

「馬鹿かよ。しかも奴等の王がいるんだぞ」

「王様が」

「ああ、そいつも倒さなきゃいけないんだぞ」

「また随分念入りですね」

流石に津上もかなり厄介なのがわかった。

「何重にもなっている感じです」

「そうだな。しかし王まで倒さないといけない」

乾は言う。

「それをどうするかなんだ」

「居場所はわかっているのか？」

葦原がそれを問うてきた。

「ああ、ある程度はな」

三原が答える。

「スマートブレイン本社だ」

「じゃあそこにすぐにも乗り込んで」

「向こうが何の備えもしていなければな」

氷川を止める形で草加が呟く。

「けれどよ。そんなこと言っても結局は何にもならねえつうんだよな」

「やっぱり動かないといけませんか」

海堂と長田はそれぞれ対照的な動きを見せていた。海堂は顔を上げており長田は俯いている。しかし二人共悩んでいるのはわかる。

「素直にスマートブレインに乗り込んで潰されるだけだ」

草加は言う。

「しかし動かないとどうにもならねえ」

乾はそこにジレンマを見ていた。

「どうすればいいんだよ」

「果たし状とかは？ たつ君」

啓太郎は何かを思い出したように言うてきた。

「それだとき。向こうをおびき寄せて」

「馬鹿、そんなのに乗るかよ、奴等が」

乾は呆れた声で啓太郎に返す。

「そんな簡単な相手ならこんなに困らねえだろ」

「そうか」

「そうだよ。しっかしなあ」

どうすればいいかわかりかねていた。話が詰まるうとしたところでふと阿部里奈が部屋に入ってきた。

第二十二章 果たし状

「また暫く見ないうちに大所帯になったわね」

彼女は部屋に入るとまずは乾達を見て述べた。

「あんたが生き返ったってのは真理から聞いたけれどね。まさかと思っただけれど」

次に草加を見て言う。

「長田さんはよかつたけれどね」

「俺と随分態度が違うな」

里奈が長田に笑顔を向けたのを見て草加は憮然とした顔で呟く。

「まあ気にしないでね」

「ああ」

啓太郎にも応えるがそれでも釈然としない様子であった。その間に乾が里奈に声をかけていた。

「それで里奈」

「何？」

「その手に持つてるのは何だ？」

「ああ、これね」

見ればそれは一通の封筒であった。それを乾達に見せてきた。

「郵便箱に入っていたのよ」

「郵便箱にか」

「そうよ。差出人は……えっ」

里奈は封筒の裏に書かれた名前を見て急に表情を変えた。

「何、これ」

「誰なんだ？スマートブレインからか？」

「そのまさかよ。村上峽児から」

里奈は驚いた顔でこう述べる。

「どうするの？」

「どうするのってよ」

乾も他の面々も驚きを隠せない顔で里奈に顔を向けていた。

「読んでみるしかねえだろ」

それが乾の答えであり他の面々の答えでもあった。

「何かわからねえけれどよ」

「そう。じゃあ」

「ああ」

乾が里奈から封筒を受け取った。その封をすぐに切る。

真理に啓太郎もやって来て手紙の中を見る。それは丁寧に手書きで書かれていた。書かれていることは一同が予想した通りであった。果たし状であった。

親愛なる乾巧様並びに私達の友人である方々へ

長きに渡って私達にお付き合いして下さっている皆様を我がスマートフォンブレイン社が主催するパーティーに招待致します。場所は奇巖山。時間は二十三日の正午。お待ちしております。

村上峽児

レオ

影山冴子

北崎信也

ジエイ

澤田亜季

六人の連名であった。文章は簡潔であったがそれは明らかに果た

し状であった。それもオルフェノクからの全面的な宣戦布告であった。

「向こうから来たな」

「ああ」

乾の言葉に葦原が頷く。

「まさかとは思ったけれどな」

「向こうから来ましたね」

氷川は三原の言葉に頷く。

「これは相当な催しになるんじゃないかな」

「けれどこれで動きました」

草加に津上が述べる。

「それでどうするの？皆」

「決まっています」

長田が真理に答える。

「というつまさか」

「おいおい、御前が今言ったんじゃないか」

海堂は啓太郎に突っ込みを入れた。

「行く」

乾は一言で終わらせた。

「奇巖山へ」

「行くの？ たつ君」

「だから御前が言ったんだろ、果たし状を出したらって」

海堂と同じ突込みを彼も入れた。

「それはそうだけれど」

「ええと、確か」

一同はここでカレンダーを見た。

「今日が二十二日だから」

「明日です」

津上が乾に答える。

「早いですね」

「まあいいさ。うだうだ悩む暇がなくてな」

「じゃあたっ君もう」

「啓太郎、明日だ」

乾はまた啓太郎に述べた。

「いいな」

「わかったよ。けれどさ」

啓太郎は乾だけでなく皆に対して言う。

「結花さんも他の皆も生きて帰ってよ。御馳走一杯用意してるから
さ」

「ああ、じゃあな」

乾も他の者達もそれに頷く。そして次の日の朝。戦士達は戦場に向けて旅立ったのであった。

「絶対だよ」

啓太郎は真理、里奈と共に玄関で彼等を見送った。真理と里奈もまた彼等を見守る。だがあえて一言も発しなかった。ただ彼等を見送るだけであった。

第二十三章 ライトルーパー

七人は奇巖山に辿り着いた。まだそこには誰も見当たらない。氷川だけがいない。

「誰もいないっていうのは間違いだろうな」

乾はバイクから降りて周囲を見回しながら呟いた。奇巖山は至るところ岩と石ばかりであった。他には何も無い。それを見るとまるで山と言うよりは荒地であった。七人はその中にある盆地のようないろにいた。周囲は岩山ばかりである。正面にとりわけ大きな青い岩山がある。

「周囲からとんでもない気配を感じるぜ」

「そうですね」

乾のその言葉に津上が頷く。

「いるみたいですよ、それも大勢」

「はっはっは、おわかりのようですね」

それに応えるかのように村上の声が聞こえてきた。

「その通りです。ようこそおいで下さいました」

七人の前に村上とレオ、ラッキーグローバーの面々が姿を現わした。高い場所から八人を見下ろしている。

「どうですかここは。宴の場に相応しいでしょう」

「シャンパンも御馳走もなしでか」

乾が彼に言い返す。

「それで何がパーティーだ」

「戦いもまた宴です」

それが村上の返事であった。

「そうではないですか？」

「そうか。なら容赦はいらねえな」

乾はすぐに携帯を取り出してきた。草加と三原もそれに続く。

「変身！」

三人はそれぞれ変身した。長田と海堂はオルフェノクになり津上と葦原も変身していた。そこへ氷川がG3Xになってやって来た。

「間に合いましたね」

「今はじまるところだ」

乾が彼に返す。

「いよいよな」

「ええ。じゃあ」

「これで役者は揃いましたか。では」

「来い！」

三原が村上に対して叫ぶ。

「ここで御前達を！」

「いえいえ。宴なのですから催しを用意しておきましたよ」

「催し！？」

「それは一体」

「さあ諸君」

村上は今度は津上と葦原に伝えるようにして声をあげた。両手を広く掲げると周囲に無数のバイクに乗ったヘルメットの者達が姿を現わした。

「ライオトルーパーか」

草加がそれを見て言った。

「しかも尋常な数じゃない」

「一人です」

村上は誇らしげな様子でそう答えた。

「一人だあ！？」

「まさか全てのオルフェノクを」

「そうです。我がスマートブレインの全社員をね。動員したのですよ」

村上は海堂と長田に言う。

「それだけではなく海外からも集めました。つまりこれは」

「オルフェと俺達の決戦つてわけか」

「その通りよ」

影山が妖艶でありながら酷薄な笑みを浮かべながら乾に答えてきた。

「それだけに村上君が頑張っちゃって」

「生きているオルフェノクを皆集めたんだよ」

今度は北崎が述べた。

「一万人というがそれではきかない」

ジエイも言う。

「どれだけいるかはわからない。だが今我々に賛同するオルフェノクは全員集まっていると言っている」

「そうだ。これがパーティーだ」

今度言ったのは澤田であった。

「俺達オルフェノクの時代のはじまりを告げるな」

「御前達ヲココデ倒ス」

レオもまた彼等を見下ろしていた。

「サア、死ネ」

「死ねと言われて死ぬ奴はいないんだよ」

乾はその圧倒的な数を前にしても態度を変えない。

「やってやる。どれだけでも同じだ！」

「数だけ揃えても意味ないんじゃないかな」

草加もそれに続く。

「質がなければな」

「そうだ、幾ら数がいても」

三原は少し怯えが見られるがそれでも逃げない。

「勝ってやる！」

「じゃあかなり辛いでしょうけれど」

「やるか」

津上と葦原が辺りを見回して述べる。

「いいですね、氷川さん」

「アンノウンの時みたいに」

「ええ。では」

「ただ。八人ではないです」
「ここで後ろから声がした。」

「!？」

「誰だ」

八人の後ろから二十人程のG3Xに似た強化服の者達がやって来た。その先頭にいるのは。

第二十四章 木村沙耶

「私ですよ」

「北條さん」

「氷川君、聞こえる!？」

「ここで小沢から氷川に通信が入った。」

「はい」

「今北條君とG5チームも到着したわ。そして」

「そして」

「私も」

「何っ、君は」

「生きていたのか」

草加と三原が北條と共に姿を現わした一人の女を見て驚きの声をあげた。それは木村沙耶であった。彼女もまた蘇っていたのだ。

「ええ。黒い服の人に」

「そうか。やっぱりな」

草加は木村のその言葉を聞いて納得したように頷く。

「今は三原君がデルタなのね」

「ああ、悪いけれど使わせてもらってるよ」

「ええ、わかったわ」

三原の言葉ににこりと笑って答える。

「私は私の力で戦わせもらうから」

「それは一体」

「それは」

木村の目が白く光った。彼女はそのままオルフェノクに変身する。カメレオンオルフェノクであった。

「彼女のことは小沢さんから聞きましたね」

北條が八人に述べる。

「それで協力して頂いているんですよ。人間として」

「人間としてか」

「そうです、人間として」

乾に答える。

「乾巧君、君と同じようにですよ」

「俺のことを知っているのか」

「はい」

乾に対して頷く。

「そのうえで協力させて頂きます。宜しいですね」

「わかった。じゃあ頼む」

「沙耶、御前も」

「頼むぞ」

「ええ、わかったわ」

木村は草加と三原に応える。

「私も人間として」

八人ではなくなった。しかし村上もラッキョーグロバーの面々もそれを見ても余裕の笑みを消してはいなかった。

「役者は多い方がいいのです」

それが村上の言葉であった。

「見栄えがしますからね」

「じゃあ皆」

北崎が周りのライオトルーパー達に声をかける。

「どうぞ」

「俺達はどするんだ？」

「慌てることはないわよ」

影山がジエイに述べる。

「ゆっくりとね。見物していればいいから」

「高みというわけか」

「そういうこと」

悪意のある笑みであった。その笑みは乾達に向けられている。「じゃあ下がらせてもらおう」

澤田は素直にその言葉に従う。

「楽しみは後に取っておきたいからな」

「待ッテイルゾ、乾巧」

レオは乾を見て笑みを浮かべている。挑発する笑みであった。

「死又コトハナイヨウニ」

六人はその場を後にする。それと同時にライオトルーパーが襲い掛かる。戦いが遂にはじまった。

「一斉射撃です」

北條は部下達にそう命じる。それを受けて砲撃に近い射撃が放たれた。

次々とライオトルーパーの部隊に爆発が起こり吹き飛ばされる者が出て来た。しかしそれでも数の減りは僅かであった。

「一万人以上だからな」

乾はそれを見て述べる。

「そうそう簡単にはな」

「じゃあ簡単なことだ」

草加は携帯を入力する。それでサイドバッシャーを変形させてきた。

「これならな」

それに飛び乗る。いきなりミサイルを放ってライオトルーパーに攻撃を浴びせる。

「乾、三原、君達もだ！」

「わかった！」

「なら！」

二人もそれぞれ兵器を呼ぶ。それでミサイルを放つ。乾はオートバジンを空に展開させて攻撃を浴びせる。

氷川も遠距離攻撃に入る。次々とガトリングガン放つ。

「氷川君、遠慮することはないから」

小沢がまた通信を入れる。

「見渡す限り敵だからね」

「わかってます！それじゃあ」

「近付いて来るのは俺達が！」

「やらせるか！」

津上と葦原は接近してきたバイクを次々に蹴り倒して止めをさしていく。海堂と長田、そして木村もそれに加わる。だがあまりにも数が多い。北條のG5の者達から先に傷ついていく。それは無視できない有様だった。

「危険ですね」

北條は一人が傷を受けるともう一人がその手当で、フォローに回るのを見て述べた。それだけでかなりの穴が開く。ライオトルーパーはそれを狙っているのかまずは彼等を攻めてきていたのだ。

「私達をですか」

「北條さん、どうしますか」

「かといつても怪我人を見捨てるのは」

「それは僕が許しません」

「そう言うと思っていましたよ」

氷川のその言葉に声で笑った。

「仕方ないですね。今は」

「安心して下さい。数は減っていますから」

「いや、増えている」

乾がそう言ってきた。

「オートバジンが遠くまで攻撃を仕掛けている。これはかなりやばいぞ」

「ぬっつ！」

葦原はライオトルーパーのバイクの車輪をそのまま受け止めた。それを思いきり投げて他のライオトルーパーに投げつける。

「うおおおおおおおっ！」

派手な爆発が目の前で起こる。だがそこからまた一騎出て来た。

「そこかっ！」

乾が横からそのバイクを蹴り飛ばす。それで葦原を守る。

「大丈夫ですか!？」

「ああ、心配するな」

葦原は彼にそう返す。

「しかしな。これだけの数はやっぱりな」

「ちよつと予想していなかったからな」

「そうですね」

海堂と長田も次々に攻撃を浴びせる。しかしその側から敵は出て来る。

「こつなつたら！」

「止めた方がいいな」

突撃しようとする三原を草加が止める。彼等は相変わらずそれぞれのマシンに乗ってミサイルを放ち続けている。

「敵の中に入ればそれで袋だ」

「そうか」

「ああ。今は一人でも戦力が必要だ」

ミサイルを放つ側からやって来るライオトルーパー達を見据えての言葉だった。彼はそれだけの数を前にしてもまだ怯んではない。

「無茶はするな」

「わかった」

「けれどこのままじゃ」

木村は姿を消しながらオートバジンを確実に葬っている。その強さは海堂や長田に引けを取らない。それでも傷を受けだしていた。

「何時かは」

「数が必要なのか」

不意に誰かの声があった。

「オルフェノクか？」

「近いかも知れない」

一人の男が悠然と歩いて来る。津上達は彼の姿を見て声をあげる。

第二十五章 ライダー達

「木野さん」

「貴方もまた」

「そうだ。俺もまた運命に導かれてここまで来た」

周りから迫るライオトルーパー達をまるで木の葉を払うように退けていく。そのまま津上達の前までやって来た。

「アギトの力、今ここに」

両手を一旦クロスさせそれを腰にやる。するとベルトが現われて光がそれを包んでいく。

それと共に左手は懐にやり右手はゆるりと前に出す。するとそこに獣じみた異形のライダーが姿を現わした。

「行くぞ」

そのままオルフェノク達と戦いに入る。そしてそれは彼だけではなかった。

「北條君、そこか！」

一條もやって来た。その横には五代もいた。彼はバイクに乗っている。

そのままの構えで変身に入る。彼もまたライダーになる。

「変身！」

「またライダーが」

「俺は仮面ライダークウガ」

彼は名乗る。

「オルフェノクとの戦いに俺も！」

「いいか北條君」

一條は北條のところに来る。クウガはその間に乾達と合流する。

「何とか囲みはあのライダーと四号、いやクウガで作った。君はそこから動け！」

「その突破したところをさらに荒らせというわけですね」

「それと同時に負傷者を安全な場所に」

「わかりました」

北條はそれに頷く。二人はすぐに作戦を決定したのであった。

「ライダーが二人か。これは有り難いね」

海堂は思いも寄らぬ援軍の登場で活気付く。

「けれど海堂さん、敵はまだ」

「わかってるさ。まったく心配性だな」

笑って長田に返す。その声もリラックスしてきていた。

「けれどな。状況は変わってきたぜ」

「ですね。けれど敵はまだまだ」

またライオトルーパーが来るがその頭を撃って倒す。バイクだけが通り過ぎて後ろで爆発する。

もう一騎来る。しかしそれは突如として空中から現われた巨大な赤い龍の炎で焼かれる。そのまま紅蓮の中に消えた。

「何だ!？」

「今のは一体」

「ドラグレッダーだ」

乾に応えながらまた一人ライダーが現われた。赤いライダーだ。

「どうやらオルフェノクを捕食した場合もかなりの力を得られるよ
うだな」

「誰だ御前は」

「仮面ライダー龍騎」

彼は名乗った。

「こちらに案内されたけれど。何だよこりゃ」

「城戸君だったか。来たか」

「五代さんか」

クウガの姿を認めて彼に声をかける。そこに秋山も来た。

「あんたもう来ていたのか」

「ああ、間に合ったな」

五代はそう声をかけてサムズアップをする。城戸もそれに応える。

その後ろから秋山が声をかけてきた。

「城戸、他にも来ているぞ」

「えっ、俺達の他にもライダーがいるのかよ」

見れば目の前にファイズやアギトがいる。それに気付いたのだ。

「しかも変な格好だな」

「御前に言われたくはねえよ」

乾はむっとした声でそれに応える。城戸はその声にし戸惑った。

「俺もかよ」

「お互い人のことは言えないだろ」

そう言い合うところにまたライオトルーパーが来る。慌てて敵を倒す。

「すげえ数だな、おい」

「お喋りをしている時間はないみたいだな」

秋山も横で剣を振るっている。そこで銃撃が来た。

今度出て来たのはゾルダであった。他にインペラーとベルデもいる。彼等だけでなく周囲から他のライダー達もやって来る彼等も次々とライオトルーパー達と戦闘に入る。

「何かよくわからないけれど援軍か？」

「そうみたいだな」

秋山が城戸に伝える。

「おい」

秋山はあらためて乾達に声をかける。

「俺達は少なくともあんた達に協力する。これでいいな」

「ああ、じゃあ頼むぞ」

「わかった。やるぞ城戸」

「ああ、こいつ等どう見たって普通の相手じゃないしな」

倒したすぐ側から青白い炎に包まれて灰になっていく。城戸はそれを見て述べる。

「これがオルフェノクっていつのか」

「そうだ。あんた達が今まで何とやり合ってきたのかわからねえが

「多分勝手が違うからな。注意しろよ」

「わかった、何はともあれ助太刀するぜ」

「よし。これでかなりこつちが有利になったな」

草加は今の状況を見て述べる。

「これで奴等のところへ行ける」

「ああ」

三原がそれに頷く。

「行くか乾、草加」

「よし」

「じゃあこれだ」

乾と草加はそれを受けてジェットスライガーを呼ぶ。彼等のところへ来る前にライオトルーパー達を吹き飛ばしていく。そうして三人の前にそれぞれ来た。

「これで風穴を開ける」

乾はそれに乗って述べた。

「そのままあいつ等のところに行くぞ」

「ここは俺達に任せる」

五代が彼に声をかける。

「いいな」

「ああ、じゃあ頼むぞ」

「よし、行くぞ草加、三原」

乾はその言葉を受けて草加と三原に顔を向けてきた。そして言う。

「言われなくてもわかってるさ」

「このジェットスライガーなら」

三機のジェットスライガーが発進する。ミサイルを派手に放った後で突き進む。ライオトルーパー達は為す術もなく吹き飛ばされそこに道ができる。後を海堂と長田、津上、氷川、葦原が続く。しかしどういつわけか木村はそこに残った。

第二十六章 残る者達

「君は行かないのか!？」

「ええ」

木村はオルフェノクの姿のままだった。その姿で五代に応える。そこに残りライオトルーパー達を倒していく。

「私はここで。戦います」

「そうか。俺もだ」

「貴方も」

「そうさ。皆の笑顔の為に」

それが五代の戦う理由だ。今それをはっきりと述べた。

「戦う。だから今も」

「貴方は。いい人ですね」

木村は彼のその言葉を聞いて言った。

「その心は強さと共にあります」

「有り難う」

サムズアップをする。すると木村も少し戸惑ってからそれに同じサムズアップで返してきた。互いに表情はわからないが気配は笑っていた。

「おい蓮」

城戸がそんな二人を見て秋山に声をかけた。

「俺達もな。やるか」

「やるなら御前だけにするんだな」

秋山はクールにそう返す。

「俺は俺でやらせてもらう」

「ちえっ、そうかよ」

そんな彼の言葉を聞いてふてくされたように述べる。

「全くよお。まあいいさ」

「ああ、君」

一條が彼に声をかけてきた。

「はい？」

「軽はずみには注意するようにな。怪我をしてからじゃ遅いからな」

「ちえっ、俺は信用ないんだな」

その言葉を聞いて少し肩を落とした。

「全くよお」

「つべこべ言わずに戦うんだな」

そこに北岡の派手な砲撃が来た。

「うわっ！」

「さもないと怪我をする」

「御前俺まで巻き添えにしようつてのかよ！」

「そんなこと言ってる暇があったら手を動かせ」

芝浦は目の前の敵を屠っていく。ゲーム感覚で戦っているようだ。その動きには何処か遊びの感覚がある。

「邪魔だ。どけ」

浅倉は城戸をどかして半ば無差別にライオトルーパーを倒す。

「うるうるされるとイライラする」

「何だ、こんなのもライダーかよ」

「生きる為にこっちも必死なんだよ！」

佐野はインペラーの群れを引き連れて戦術的に倒す。それは何処か北條のそれに似ている。後ろでは高見沢が姿を消しながら巧みに敵を倒していく。

「個々は強くない」

「そうですね。しかし倒せば倒す程こちらの力になるのはいいことです」

須藤は倒した敵を時折ボルキョウサーに捕食させている。そうして己の力を高めていた。

「おい、後ろ」

手塚が城戸の後ろから来る敵を鞭で払い落とした。

「いい加減戦いに神経を集中させた方がいい」

「そ、そうだな」

「さもないと怪我するからね」

「そうよ」

東條が爪で敵を切り裂く横で霧島の剣が唸る。

「あんたが死にたいっていうのなら別だけれどね」

「何か俺だけボロクソに扱われてるな、ちえっ」

「今はそんなことを言っている場合じゃないからだ」

秋山がまた彼に対して言う。

「そのうち怪我するぞ」

「そうだな。これはな」

ライオトルーパーを次々に倒す。その剣が唸ってまた敵を倒していく。剣さばき自体は見事なものであり的確に倒していく。

「真剣にやらないとな。こっちが灰になっちまうぜ」

「そろそろ数が減ってきたぞ」

秋山は目の前のライオトルーパー達を見ながら述べた。

「もう少しだ、いいな」

「ああ。しかしよ」

城戸はここであることに気付いた。

「どうした？」

「あそこにいる金色の鳥みたいなのと黒い俺そっくりのライダーは何だ？」

「あれか？」

秋山も城戸の声に顔を向ける。そこには確かに二人のライダーがいた。見れば城戸達よりもさらに強い。

「やけに強いな」

「ああ。だが敵でないのは確からしいな」

それは何となくだがわかった。

「何時か誰かもわかるだろう。しかし今は」

「ああ、とりあえずこいつ等を倒す」

城戸は新たなカードを出した。それを装着する。

そのカードでサバイブになる。変形したドラグレッダーに乗りそれでライオトルーパーを蹴散らしにかかった。

「なら俺も」

秋山もそれにならう。彼もまたサバイブになり城戸と同じようにして敵を倒していくのであった。ライオトルーパー達との戦いも佳境に入ってきていた。

第二十七章 対峙

ライオトルーパー達との戦いを突破した乾達はバイクから降りて変身を解かずに奇巖山の奥に向かう。そこもやはり青い岩が転がる岩場でありそこに辿り着く直前に三体のオルフェノクが出る。それには津上、氷川、葦原が向かう。

「あんた達」

「ここは俺達に任せて下さい」

津上がそう乾達に対して言う。

「ここは」

「貴方達は先に」

「行つていいんだな」

草加が氷川に問う。

「ええ、どうぞ」

「あのラッキーグローバーはあんた達が相手をしてくれ」

「わかった」

「よし、そういうことだ」

葦原と三原も言葉を交あわせる。三人はそのまま三体のオルフェノクに向かう。梟、蟹、螳螂にそれぞれ似ていたオルフェノク達だった。

三人とオルフェノク達の戦いを後ろに乾達はさらに奥に向かう。そして遂に戦場に到着したのであった。

「お待ちしていましたよ」

村上がいた。サイガとラッキーグローバー達も。

「さて、それでははじめましょう」

そこは開けた岩場だった。盆地になつていて彼等はその広場の中央にいる。そこで人の姿のまま悠然と並んで立っていたのである。

「上の上の戦いを」

「上の上の戦いなんてどうでもいいがな」

乾が彼に言い返す。

「ここで終わりにしてやる。覚悟はいいな」

「やれやれ、相変わらず無粋な」

村上は彼の言葉を聞いても余裕を崩さない。しかしその身体から出ているオーラはかなり好戦的なものであった。それは乾達にもはつきりと感じられていた。

「しかしそれもこれで最後です」

「私の相手は長田ちゃんね」

「殺されて木場さんを騙すのに利用された恨みは」

「落ちて置いていけよ結花」

海堂が怒りを見せる彼女に忠告する。

「こいつはそれが手なんだからな」

「はい、わかってます」

「それで御前の相手はまた俺になるのか」

ジェイはその海堂を見据えてきた。

「覚悟はいいな」

「覚悟なんて最初からしちやいないがな」

海堂はそれに応えてジェイに返す。

「今度は命は幾つなんだ？」

「安心しろ、一つだ」

「それ聞いて安心したぜ」

三原の相手になるのは澤田だった。

「木村は帰ってきたぞ」

「そうか」

澤田はそれを聞いても表情を変えない。

「それはよかったな」

「やっぱり御前はもう流星塾から離れたんだな」

「当たり前だ。今の俺はオルフェノクだ」

それが澤田の言葉だった。

「そして御前がデルタになった。それで充分だな」

「そうだな」

三原もその言葉に頷く。

「それじゃあここで最後にする。いいな」

「ああ、お互いな。流星塾も何もない」

澤田はそう言っつて身構えてきた。二人の視線が衝突する。

「前にも言っつたな」

草加は北崎の前にいた。

「俺自身の仇を取らせてもらっつてな」

「飽きない人だなあ」

北崎はそれを聞いても態度を変えない。相変わらず何処かけだる
そんな感じである。それが今の草加とは対象的であった。

「何が楽しくてそうしてるかわからないけれど」

「貴様にわかつてもらっつつもりはない」

草加は彼にそう返す。

「だから覚悟はいいな」

「いいよ。僕も暇だしね」

北崎は逃げる気は毛頭なかった。もっとも彼にしてはこれも遊び
でしかない。それは態度でよくわかることだった。それが北崎とい
う男である。

「じゃあ遊んであげるよ」

「御前だけは………殺す！」

「ファイズ」

レオは乾を見据えていた。

「御前ノ相手ハ俺ニ決マツテイルヨウダナ」

「決まっつていたらどうなんだ？」

乾は彼にそう返す。

「御前は俺に倒される。それだけだろうが」

「ソレハ俺ノ台詞ダ」

相変わらず癖の強い日本語で応える。

「楽シマセテモラウゾ」

「いいわね、これが最後の遊びよ」

影山が妖しい笑みを浮かべて仲間達に言う。

「それじゃあ」

彼等も変身した。レオはサイガになる。村上だけは相手がいないので人の姿のまま後ろに下がる。乾達とラッキーグローバーの最後の戦いがはじまった。

第二十八章 意地

ラッキーグローバーは固まっている。澤田が右に、ジェイが中央、そして影山が左にいる。しかし北崎は少し離れていた。

「僕は単独行動かな」

「あら、自信あるのね」

「あるよ」

そう影山に返す。

「だってさ。久し振りに遊べるから」

「そうね。確かに久し振りね」

影山もその言葉に笑みを浮かべる。彼女も楽しんでいた。

「この前は少し遊んだだけだったしね」

「そういうこと。何か生き返ってる人もいるし」

「貴方もね。生き返っているなら」

「俺達もだ」

「そういうことだな」

ジェイと澤田も頷く。見れば影山以外は全員生き返っているのだが動き自体は生きていた頃と何ら変わることはなかった。むしろ素早くなっていた。

「何だこいつ等」

海堂はジェイの動きを見て声をあげる。攻撃をかわすので手が一杯だ。

「攻撃受けたらこのまま吹き飛ばされそうだぞ、おい」

「確かにロブスターオルフェノクも」

「ふふふ、わかってるわね」

影山は長田のその言葉に笑ってきた。剣を前に翳して笑っていた。「そうよ。私達は王の力を受けているのよ。そのせいよ」

「それか。この力は」

三原はそれを聞いて言った。彼も澤田の伸縮する攻撃を前に防戦

一方であった。

だが彼等はまだまだだった。草加は変身したうえでその凶暴さを露わにする北崎の猛攻の前に為す術もなかった。

「くっ……」

攻撃を受けて後ろに吹き飛ばされる、ベルトは外れはしなかったがダメージはかなりのものだった。何とか起き上がった彼を見て北崎が述べる。

「あれ？前と同じ？」

「やっぱりこいつは一筋縄じゃいかないか」

草加は立ち上がる。だが既にダメージはかなり受けていた。

「草加、そいつは一人じゃ無理だ」

三原が彼に声をかける。

「だから今は何とか凌げ」

「じゃあ君達がその目の前の相手に何かできるのかな」

草加は三原に対して言う。

「澤田、かなり強くなってるだろ」

「ああ、しかし」

「乾もあれだ」

見れば空を飛ぶレオの上からの攻撃に彼も為す術もない。掴み上げられて上から叩き落されそうになるところを何とか受身していた。彼も今の相手だけで手が一杯だった。

「それにな。こいつには借りがある」

流星塾の同窓会からの北崎との因縁。彼はそれを忘れたことはない。

「だからな。こいつは俺が倒す」

腕にブレイガンを左手に逆手に持つ。それを手に北崎と対峙する。

「君達は君達の相手をしろ」

彼はそう三原達に言う。

「こいつは俺が何があっても倒す」

「わかった」

三原はそれに頷く。そのうえであらためて澤田を見据えた。

「やっぱり御前は俺の手で決着をつけてやる」

「いいんだな、それで」

澤田も引きはしない。三原を前にしてその単眼を光らせていた。

「最も最初から容赦はしないがな」

「そうだな。御前はもう完全にオルフェノクになった」

三原はそれがわかつている。だからこそ澤田を前にしても逃げなかった。彼も今流星塾の因縁を終わらせる為に戦っていた。

「ちいつ」

乾はレオと戦っている。しかし彼も劣勢は隠せなかった。

空を飛ぶサイガはそれだけで圧倒的な力を持っていた。上から攻撃ポジションを有利に取りそこから思うままに攻撃を浴びせてくるのだ。乾はオートバジンの援護も受けているがそれでも限界があった。

「御前、弱イノカ？」

レオは上から彼に声をかけている。声は笑っていた。

「ファイズノカ。ソノ程度ナノカ？」

「その程度っていうのがどの程度かわからねえがな」

乾は上にいるレオを見据えて言う。

「御前の力、それだけで勝てると思っんじゃねえぞ」

「デハドウスルツモリダ？」

レオは上から彼に問う。

「見せてやるさ、もうすぐな」

「デハ見セテモラウカ」

レオの余裕のある声は変わらない。

「御前ノソレヲナ」

乾は上を見据えている。しかし劣勢は誰の目にも明らかであった。しかもだ。後ろには村上がいた。彼がいるということが乾達には負担に、レオ達には余裕となって出て来ていたのだ。

「ふふふ、私の相手はいませんか」

人間の姿のまま余裕を見せていた。

「それはどうにも。退屈ですね」

「すぐに退屈じゃなくしてやるぜ」

海堂が彼に対して言う。

「すぐにな」

「そのわりには劣勢ね」

影山はその彼に対して笑う。

「海堂君、まだ甘いわね」

「甘いのは認めるけれどな」

海堂も述べる。

「それでも御前等を倒す位はできるぜ」

「おやおや、私の相手をして頂くと」

村上は海堂のその言葉を聞いて笑う。

「それは面白い。では是非」

「くそっ、舐めやがって」

海堂は村上の今の言葉に笑う。高みからの笑みであった。

「今に見ていやがれ」

「いや、君が見るのは違うものだ」

違う声が聞こえてきた。

「何っ」

「その声は」

海堂と長田がその声に気付く。後ろから木場が姿を現わした。

第二十九章 木場の決意

「木場!？」

「木場さん」

「俺、あれから色々と考えたよ」

木場は二人の方を見て微笑んでいた。その右手には黒い携帯がある。

「それで決めたんだ。俺は戦う」

「ほう、では誰と戦われるのですか？」

村上はその彼に対して問う。

「それが問題なのですがね」

「それを決めたんだ」

木場はその言葉に対して答える。

「俺は戦う。人間として、そして……」

右手の携帯を入力する。そして今。

「ライダーとして!」

村上を見据える。彼は叫んだ。

「変身!」

腰にセットする。黄金色の光に包まれ彼は漆黒のライダー、オーガとなったのであった。

木場はまだ村上を見ていた。村上も木場を見ている。

「どうやら私の相手は決まりですね」

「そうみたいね」

影山がそれに応える。

「村上君、頑張ってね」

「ふふふ、それでは私もまた」

顔が急変する。そのままオルフェノクになる。木場と村上は対峙した。

「貴方とは何かと縁がありましたでしたがこれで終わりですね」

「いや、終わるのはそれだけじゃない」

木場は彼とはまた別のものを見ていた。その見ているものを前にして言っていた。彼は今村上を見ていたが他のものも見ていたのだ。それこそが重要なのであった。

「俺のしがらみも。ここで消してやる！」

「そうですね。貴方が死ぬことで」

村上は一步前に出た。

「それが完成されるのですよ」

「俺は死なない」

無論木場もそのつもりはない。一步前に出る。

二人も戦いに入った。木場は剣を抜き村上に立ち向かう。

「やってやる！」

「ははは、では私は」

あの薔薇を出した。薔薇が木場を襲う。しかし彼は剣を前にかざしそれを防ぐ。

「やらせない！」

オーガの力を発揮した。薔薇を防いだ後で接近戦に突入する。

乾も木場を見ていた。しかし彼は今は目の前の強敵を前にしていた。

レオが前にいる。レオは空から銃で彼を襲う。

「サア何ナノダ？」

彼はその上から乾に問う。

「御前ノ切り札トヤラハ」

「見たいっていうんだな」

「ソノ通りダ」

彼は答える。

「面白ソウダ。見セテミロ」

「じゃあ見せてやるぜ」

乾は腰を落とす。屈んだ姿勢で攻撃態勢に入る。跳んだ。オートバジンを踏み台にする。

「ムッ!?」

「闘いつてのはな、やり方が色々あるんだよ!」

跳びながら叫ぶ。照準を合わせる。赤い一条の光がサイガをターゲットイングした。

斜め下から彼を襲う。クリムゾンスマッシュがレオに向かって放たれた。

「これでどうだっ!」

突然の攻撃にレオも流石に為す術もなかった。直撃こそかわしたが地面に叩き付けられた。背中から直撃を受けたのでロケットに激しいダメージが加わった。煙が起こり使い物にならなくなった。

「マサカソウ来ルトハナ」

「あまり俺を舐めてるからだ」

乾はダメージを受けながらも起き上がるレオに対して言った。

「さあ、今度はどうするんだ?」

「ソレデ勝ツタト八思ワナイコトダ」

レオは今度はトンファーを出す。両手に持ち構えを取った。乾もファイズショットを装着する。それで接近戦に入った。

第三十章 仇への決着

海堂は剣を手にするジエイと戦っている。やはり彼は強い。だが海堂もまた剣を持っていた。それを手に突っ込む。

「無駄だ」

「ただ俺が突っ込んできたと思ってるのかよ」

「何っ！」

「喰らえっ！」

隠していたカードを切る。それは猛毒だった。

「うっ！」

海堂はここで口から猛毒を吐いてきたのだ。それはまともにジエイの顔にかかった。

「毒………これは」

「海蛇の毒つてのはな。かなり強いんだぜ」

海堂は今の切り札を見事当てて会心の声をあげる。

「そしてだ………これだよ！」

そのまま突進する。その手でジエイの胸を一閃する。

「これでどうだ！」

二人の影が交差した。一瞬動きが止まる。それが終わってからジエイの身体ががくりと前に落ちる。

その横では長田が影山と闘っている。長田は影山の剣と爪の前に防戦一方だ。

「ふふふ、動きが鈍くなってきたのじゃないかしら」

「くっ………」

「動きが鈍くなっているわよ。そろそろ限界かしら」

「まだ………！」

しかし長田はまだ顔をあげている。それでも限界が近いのは明らかだった。実際に動きが鈍くなっていたからだ。それは自分でもわかっていた。

だからこそ自分でも残された時間が少ないのはわかっていた。彼女も賭けに出ることにした。

「可能性は少ないけれど……」

長田は一か八かの賭けに出ることにした。彼女は一旦動きを止めた。隙をわざと見せてきたのである。

「観念したということかしら」

影山はそんな長田を見て笑ってきた。狙いを定めるかのように構えてきた。

「それなら。一撃で楽にしてあげるわ」

剣を振りかざして突撃して来る。長田はここでその賭けに出た。

「はあっ！」

翼を出して飛ぶ。それでまずは影山の剣をかわした。

「なっ！？」

一閃した剣は虚しく空を切った。慌てて周りを見る。

見れば長田は上にいた。そこから。弓矢を一斉に放ってきた。

「これで！」

その弓矢で影山を貫く。乾坤一擲の賭けは何とか成功した。

三原は澤田との闘いを続けていた。しかし彼ではやはり澤田の相手は辛かったのかまたしても吹き飛ばされてしまった。

「ぐわっ！」

「どうした三原」

澤田は仰向けに倒れている彼に対して声をかける。

「その程度なのか？」

「まだだっ」

三原は何とか起き上がる。そのうえで澤田に対して言う。

「御前だけは何があっても！」

「いい覚悟だ」

そう述べて折り紙を出してきた。それで手の中で燃やす。

「御前もこうして燃やしてやる」

「それだけか？」

だが三原はその紙を燃やす澤田に対して言う。

「何？」

「それだけかって聞いているんだ」

また澤田に言い返す。

「御前の言いたいことはそれだけなのか？俺を倒すだけで満足なのか」

「何が言いたい」

「それではいそいそですかって納得できると思っっているのかよ」

三原は言う。何とか立ち上がって澤田を見やる。

「それで納得してデルタになれるか！」

「そうか。では見せる」

澤田はその三原に言う。

「その納得できないものをな」

右腕を伸ばしてきた。だがそれをデルタムーバーで狙撃して退ける。

「むっ！？」

「まだだ！」

それで隙ができたのを見逃さない。三原はここで決着を着けに出た。

「チエック」

音声入力しポインターモードに変える。それをセットする。

「エクシードチャージ」

電子音声が届く。それを聴くと跳ぶ。空中で澤田をロックオンし片足でルシファーズハンマーを放った。白い光が矢となり澤田に突き刺さる。

草加は確かにオルフェノクになっていた。しかしそれでも北崎の相手はかなりの負担であった。

その攻撃を受けて立ったまま苦悶の声をあげる。何とか立っている有様であった。

「くっ……」

「凄いよ、まだ立っているなんて」

攻撃姿勢を露わにしながら北崎は述べる。

「頑張るねえ。僕こんなに楽しんだのはじめてだよ」

「それでもまだやってやる」

草加は北崎を見据えて言う。

「御前を倒す……！」

「さつきから何回も聴いてるけれどさ」

「何回でも言っただけ」

草加はそれでも言う。

「御前を倒すまではな！」

「じゃあ見せてよ」

北崎の言葉が軽いものになった。

「その言葉をさ」

「うおおおおおっ！」

「ワンパターンだね」

向かってきた草加を左手で軽く払う。

「その程度じゃ僕は倒せないよ」

「じゃあな」

草加は倒れながら彼に言う。

「これはどうだっ！」

倒れる瞬間に両手で地面を撃つ。それで態勢を戻しそのまま北崎に向かう。蹴りとカイザガンの一撃を浴びせる。

「なっ!?!」

「これで決めてやる！」

草加はさらに攻撃を仕掛ける。今の奇襲で態勢を崩した北崎にポインターで照準を合わせる。だがそれは的確に急所を狙っていた。

照準はこめかみに当てていた。左側面から奇襲を当てて北崎の右に出ていた。そこから右のこめかみに照準を当てていたのだ。

態勢を崩した北崎の一瞬の隙をついていた。草加は彼が持っている力の極限まで使ってそこまで手順を踏んでいた。そのうえで彼は

最後の勝負に出た。

跳ぶ。両足でゴルトスマッシュを放とうとする。北崎はまだ態勢を崩している。そこに一撃を浴びせた。

それは他の三人が攻撃を浴びせたのと同時であった。北崎にはカイザの、澤田にはデルタの紋章が浮かんでいた。北崎、ジエイ、影山には青白い炎が、澤田には赤い炎が浮かんでいた。それはオルフェノクにとって死の証であった。

第三十一章 ベルトの秘密

四人は一旦人間の姿になった。その姿でそれぞれの相手を見やっ
てきた。

「まさかここでやられるなんてね」

影山は四人を見て言ってきた。

「やってくれるわ」

「危なかったわ」

長田は彼女にそう返す。

「今の賭けに負けていたら」

「そう、賭けだったの」

「こつちもだ」

海堂も今何とかが立っているという有様だった。

「切り札だったからな。あれが外れていたらな」

「俺の勝ちだったか」

ジエイはそれを聞いて呟いた。

「澤田、これで終わりだな」

「まさかそう仕掛けて来るなんてな」

「俺だつてな。負けるわけにはいかないからな」

三原は人間の姿でふらふらになりながらも述べる。その横には草
加と北崎がいた。

「僕が負けるなんて……」

「これで仇は取った」

草加は彼に対して言う。

「俺自身のな」

四人は灰となり消えた。ラッキীগロバーとの戦いも今ようや
く幕を下ろしたのであった。しかし戦いはまだ続いていた。

木場と村上、乾とレオの戦いは続いていた。村上はやはり強かつ
た。

それでも木場はオーガの力もあり何とか戦っている。それでも劣勢は否めなかった。

「ふふふ、その程度ですか」

村上が彼に対して言う。

「オーガの力、思った程ではなかったですね」

「まだだ」

薔薇の嵐とその打撃を受け続けても木場は立っていた。

「俺は決めたんだ。もう迷わないって。だから」

「では来るのです」

村上はその彼にまた言う。

「貴方の力を見せてはどうですか」

また攻撃を浴びせる。一撃一撃がオーガを揺らす。

「うっ……」

「帝王のベルトもその程度なのですか」

「帝王のベルトだと」

「はい。このベルトはデルタを参考に作られたものでしてね」

村上は今彼に対して述べる。

「サイガのベルトと共に作ったのですよ。サイガが天、オーガが地」

「その帝王のベルトでまたスマートブレインは王を守るつもりだっ

たのか」

「そうだったのですよ。どういうわけかオーガは貴方の手にあるの

ですがね」

「では逆に言えばこのオーガのベルトは王を」

木場は今それに気付いた。オーガのベルトはオルフェノクの王を

倒せるものでもあったのだ。それまでの三本のベルトと同じく、で

ある。

「ですがそうはいきません」

村上はそこまで語ったうえで木場に述べる。

「貴方を倒して今度は私が使わせて頂きますからね」

攻撃がさらに激しくなる。全力を出してきたということだった。

「くっ！」

「さあ、もうすぐ終わりです」

村上はさらに拳を加えてくる。

「そのベルトが我々の手に戻るのも」

「まだだ」

しかし木場はここで踏ん張りはじめた。

「俺は負けない。負けるわけにはいかないんだ！」

剣を抜いた。それで村上に立ち向かう。

「むっ！？」

「オーガの力、人間の為に使わせてもらう！」

剣を一閃させた。それがまず村上を退ける。

「むっっ！」

「これで！」

村上がのけぞった一瞬の隙を逃さない。そのまま攻撃に入る。

剣から光を出す。今その刃で村上を切り裂いた。

「うおおおおおっ！」

村上を青白い炎が包む。同時にオーガの紋章が現われた。

「くっ、ここまでやるとは」

村上は人間の姿に戻って木場を見据えてきた。彼はまだ目を死なせてはいない。

第三十二章 人間の力

「貴方の力かオーガの力か」

「俺の力でもオーガの力でもない」

木場は村上の言葉に応えて言う。

「これが人間の力だ。オルフェノクの力と同じなんだ」

「人間とオルフェノクは同じですか」

「姿を変えられるだけだ」

木場はまた言う。

「それだけなんだ。その心は同じなんだから」

「ふふふ、貴方はそういう考えになったのですか」

村上は彼の言葉に笑う。しかしそれを聞いても木場は動じない。

「だから俺はもう迷わない。結花のことも乾君のことも」

「ならばいいでしょう」

村上はその言葉を打ち消さなかった。だからといって彼はそれを肯定もしないが。

「そのまま人を信じてまた裏切られるのですね」

そう言い残して灰になった。木場はその彼を見て呟く。

「それでもいい」

彼は言う。

「もう裏切られても怖くない。それもまた人間なんだってわかったから」

彼はわかったのだ。人もオルフェノクも同じだと。だから今こうして村上を倒したのだ。人として。

乾は地に降りたレオと激しい接近戦を繰り広げていた。レオは地上でもかなりの強さを誇り乾を押ししている程であった。

「何だかんだでライダーだけはあつてことかよ」

「俺八他ノ奴等ト八違ウ」

彼は言う。

「ココデ御前ヲ倒シテファイズノベルトモ」

「それは無理だな」

乾は彼に言葉を返す。

「何ッ!？」

「御前の腕じゃな、俺は倒せないんだよ」

「何だと」

「御前程度の奴はまだ一杯いた。確かに強いけれどな」

「ソウダ、俺ハライオンダ」

自身のオルフェノクの姿を述べた。

「全テノ獣ノ王ダ。ソノ俺ニ適ウノハ」

「俺だつて狼だ」

乾は彼に今度はこう言い返した。

「それにな。やっぱり経験なんだよ」

ファイズエッジを引き抜いて構えてきた。

「来いよ。そろそろ決着つけようぜ」

「望ムトコロダ」

レオもそれに応える。

「ナラバ」

両手のトンファーをそのままに突き進む。それで乾を叩き潰すつもりだ。

だが乾は落ち着いている。冷静に彼の動きを見ていた。

「乗ってきたな。じゃあ」

エッジを低くする。そして。

トンファーをかわしエッジをレオの腹に切りつける。そのまま抜けた。

「ハアッ!」

レオの身体にファイズの紋章が浮かんだ。それと同時に青白い炎が浮かんだ。

「こういうことなんだよ」

乾は立ったまま動きを止めているレオに対して述べた。顔も彼に

向けている。

「わかったか」

「今ノガ御前ノ経験ナノカ」

「そういうことだ。あえて教えてやったんだ」

ベルトを落とし人の姿に戻ったレオにそう述べる。

「授業料はいらねえからな」

「俺ノ負ケカ」

レオは乾の言葉の中で呟いた。

「百獣ノ王ノコノ俺ガ」

それが最後の言葉だった。灰になり崩れ落ちたのであった。

「とはいえつても結構辛かったな」

乾は身体中に痛みが走るのを感じながら述べた。

「やっぱりライオンだけはあつてことかよ」

「乾君」

「木場、御前も来ていたのか」

「ああ、このベルトと一緒にだね」

彼はオーガになったままだった。その威圧的なシルエットで乾の

前にやって来ていた。

「村上峽児は何か倒したけれど」

「辛かったか」

「いや……くっ」

「木場、無理はするな」

自分のことを置いておいて言う。

「いいな」

「済まない」

「とはいえつても。まだ戦える奴はいるか」

「俺は何か」

三原は痩せ我慢をして言ってきた。

「大丈夫だ」

「あまりそうは見えないがな」

「いや、いける」

「御前等は無理かな」

海堂と長田を見て乾は言った。見れば彼等は片膝をついて肩で息をしていた。

「木場と一緒にここに残れ」

「馬鹿言ってるんじゃないぜ」

海堂は人の姿に戻っていた。その姿で乾に対して言う。

「俺だつてなあ、ここまで来て………うっ」

左肩を押さえる。顔が苦悶で蹲る。

「海堂さん………うっ」

長田は腹を。二人の傷はそれぞれかなり深かった。

「木場、二人を頼む」

乾は木場に対して声をかけた。

「こつちにもライオトルーパーが流れてくるかも知れないからな」

「わかったよ」

「ああ。草加」

最後に草加に声をかけた。彼もかなりのダメージを受けているようだった。足元がおぼつかなかった。

「いけるか？」

「後はオルフェノクの王だけか」

「そうだ」

乾は草加の言葉に答える。

「あと一人だ」

「じゃあ大丈夫だ」

三原と同じく痩せ我慢をして言葉を返す。

「いけるぜ」

「よし、じゃあ行くぞ」

また二人に声をかける。

「いいな」

「わかった」

「行くぞ」

三人は一旦変身を解いた。そしてバイクに乗りさらに奥に向かう。

第三十三章 王

「乾君」

木場は最後の戦いに向かう乾に声をかけてきた。彼も人間に戻っていた。

「何だ？」

「これで最後なんだね」

「とりあえずオルフェノクのはな」

「オルフェノクのは？」

「なあ木場」

彼はここで木場に対して言ってきた。

「こんなにライダー出て来るなんて考えていたか？」

「いや」

彼は今のライオトルーパーとライダー達の戦いをくぐり抜けてここまで来ていた。そこで彼等の戦いも見た。だからこそ乾の言葉に答えることができたのだ。

「アギトだけじゃないっていうのも」

「そうだよな。何かあるぜ、これは」

乾は直感的にそれを悟っていた。

「この戦いだけじゃねえかも知れねえ」

彼は言う。

「俺達の戦いは」

「そうかもな」

それに草加が頷く。

「俺が生き返っているのも。少なくともスマートレディはそれを知っている」

「あいつがか」

「ああ」

そのうえで三原に頷いく。

「王との戦いで最後とはならないだろうな」

「じゃあ他に何かいるのかい？」

木場は不安な顔になっていた。それまでの戦いだけで終わりではないということに釈然としない思いも抱いたのだ。それは海堂と長田も同じであった。

「何だつちゆうんだ」

海堂はそれを聞いて思わずばやいた。

「まだあるのかよ」

「けれどだから私も」

「かもな」

長田の言葉も否定できなかった。

「御前も生き返ってそのオーガか？ベルトまで貰ってな」

「スマートレディは何を考えているのかわからないところがある」

木場は俯いた。彼女の行動はどうも謎が多いというのはこれまでも変わらないことが多いのだ。

「だから俺も」

「そうか。今は全然わかんねえってわけか」

海堂は何かやりきれない気持ちになってまたぼやく。

「どちらにしろ王の後にどえらい敵がいるんだな」

「けれどだ」

乾は言う。

「王を倒したら俺達オルフェノクは」

「そうだったな」

それに草加も海堂も応えて頷く。

「灰になる。どういうことだ？」

「どっちにしろ行くしかないだろうな」

三原はここで乾と草加に言う。

「答えはそれからだ」

「よし」

二人は三原のその言葉に頷く。それぞれのバイクに乗り奥へと向

かった。木場達はそれを見送る。オルフェノクとの戦いは今最後の幕が開いた。

三人は遂にその奥にまで辿り着いた。辿り着くとそこにはあの王がいた。

「あいつがか」

草加はその王が立っているところを見て乾に声をかける。

「そうだ。あいつだ」

「あいつこそがオルフェノクの王」

乾だけでなく三原も応える。

「あいつを倒せばまず今までの戦いは終わる」

「少なくともオルフェノクは、か」

草加はそれを聞いて呟く。

「まずは決着をつけるか、それで一旦は終わりだ」

「よし！」

乾が声をあげる。三人は同時に携帯を出す。

乾は上に掲げ草加は手で見せる。三原はそのまま入れて変身に入る。

「変身！」

三人同時に光に包まれてライダーに変身する。王は彼等の前に立っている。三人は彼等に向かう。王はそれに対して手からエネルギー弾を放ってきた。

「うわっ！」

三原はそれを受けてしまう。直撃こそは避けたがそれでも吹き飛ばされてしまった。

「三原！」

「だ、大丈夫だ」

乾の言葉に伝えて何とか立ち上がる。

「しかしこの力、前よりも」

「あがっているっていうのか」

「ああ、これは」

胸を抑えながら述べる。

「この前よりもな。かなり上になっている」

「どういうことかな、それは」

草加は二人に問う。

「強くなってるっていうのは」

「さあな。本当に覚醒したってことなんだろう」

それが乾の推測だった。

「だとしてもな。やらないわけにはいかないしな」

「そうだな。じゃあ」

三原が頷く。乾はその彼と草加に声をかける。

「草加、御前は右だ」

「ああ」

草加はその言葉に頷く王の左手、即ち乾の右側に回る。

「三原、左だ」

「わかった」

三原は左手に。それぞれ回る。

「三人がかりでも倒せるかどうかわからないけれどな」

「やるしかないってわけか」

「みたいだな」

三人は王に向かう。圧倒的な王の力が光となって辺りを照らす。

第三十四章 王との戦い

その頃ライオトルーパー達との戦いは終わりに近付いていた。城戸はドラゴンライダーキックで彼等をまとめて倒していた。見れば数はかなり減っていた。

「もうすぐか？」

「そうみたいだな」

秋山がそれに応える。

「あと一息だ。だが」

「油断大敵ってわけか。何か今までこんな戦いしたことあった気がするな」

「そうだな」

秋山は城戸のその言葉に頷いてきた。

「俺と御前でな」

「そうだよな。何かそれが不思議なんだよ」

彼は言う。

「御前とはずっと一緒だった気がするんだよな」

「俺もだ」

秋山もそれに応える。

「どういうわけかわからないがな」

「まあいいさ。考えたって仕方ないからな」

その通りだった。まだライオトルーパーは大勢いた。

「じゃあ最後にな」

「後ろは任せろ」

「ああ、頼むぜ」

二人だけでなく他のライダー達も向かう。その中には一条や北條もいる。彼等は円陣を組んで木村と共同してライオトルーパー達を退けていた。

「五代君は何処ですか？」

「あいつなら大丈夫だ」

戦いの中で一条は北條の言葉に応えた。

「見る、あそこを」

目の前を指差す。するとそこにはライオトルーパー達をその拳で倒していく五代がいた。

「これ位ならな。あいつは心配無用だ」

「彼を信頼しているのですね」

「そうだ」

その問いを肯定してみせた。答えながら彼も銃で敵を倒していく。

「あいつは強い、その心も」

「わかりました。では我々は我々で」

「そうだ、このまま」

彼等も人としてライダーと共に戦っていた。そう、人として。乾達もまた人として戦っていたのであった。

王はどれだけ攻撃を浴びせられても倒れはしなかった。その力は圧倒的でさえあった。

「喰らえっ!!」

「これでな!!」

三人はそれまでも絶え間なく攻撃を浴びせていたが遂に今切り札を出した。クリムゾンスマッシュ、ゴルトスマッシュ、ルシファーズハンマーをそれぞれ放つ。しかしそれを受けても王は全く平気であった。

「何っ!!」

「三人同時でもか!!」

三人は技を浴びせたままで驚きの声をあげる。攻撃は確かに決まっている。しかしそれでも王は崩れはしない。それどころか彼等を弾き飛ばしてしまった。

「うわっ!!」

「ぐわっ」

三人は地面に叩き付けられる。ベルトは外れはしなかったがそれ

でも衝撃は大きかった。

「嘘だろ、今ので」

三原ははいつくばりながら顔をあげて王を見て言う。

「俺達三人の攻撃をまともに受けて」

「効いていないっていうのか!？」

草加は片膝で起き上がって声をあげる。

「まさか」

「いや、効いてはいる」

乾は立ち上がってこう述べる。

「だが普通にやっただけじゃこいつは倒せない」

「どうするんだ、じゃあ」

「やってやる」

三原に答える。

「こつちもな。意地を見せてな!」

携帯を入力する。

「アウエーキング」

電子音が聞こえる。そして今プラスターフォームになった。

「それでやるつもりか」

「ああ」

今度は草加に答える。

「これでな。多分今のでそれなりにダメージは受けている」

屈みながらの言葉であった。

「なら………これだな!」

また跳んだ。空中で照準をセットする。そこからクリムゾンスマ

ツシュを再び放つ。

「今度は………そう簡単には防げない!」

急降下し叫ぶ。赤い円錐が王に突き刺さる。王はそれを手で受け

止めているが無駄だった。ファイズの力が徐々に押していく。

「どうなるってんだ!？」

「乾!」

草加と三原はその乾を見て言う。だが徐々に彼は押していた。

「うううううううううううう……」

彼と王はそのまませめぎ合っていた。だが遂に。勝者が決まった。

「うおおおおおおおおお！」

乾はそのまま押し切る。遂に王は敗れた。クリムゾンスマッシュが炸裂しファイズの紋章が輝く。王は途中で巨大な青白い炎として果てたのであった。

第三十五章 幕が降り

乾はその後ろに着地する。片膝をつき衝撃をそれで抑えていた。それからゆっくりと立ち上がり燃える王を見る。

「やったか」

「そうだ」

三原が答える。

「これでな。王は死んだ」

「その証拠に。見る」

草加は炎から灰になった王を指差す。

「これが何よりの証拠だ」

「そうか、やっとか」

乾はその灰を見下ろして言う。

「終わったんだな、オルフェノクは」

「そうだ、一旦戻るか」

草加は変身を解く。そのうえで乾に述べる。

「待ってる奴等がいるからな」

「そうだな」

乾はそれに頷く。そして彼も変身を解いた。三原もそれに続く。

「それじゃあな」

「そういうことだ」

「行くか」

草加と三原は乾を急かす。

「わかった」

乾が頷き三人はバイクに乗る。そしてまずは木場達と合流した。見れば三人は健在だった。

「何ともなかったか、木場」

「うん、こっちはね」

「おかげで暇だったぜ」

「もう、海堂さんたら」

三人はいつもの調子だった。

「それで御前等どうするんだ？」

乾は三人にあらためて問うた。

「これからは」

「俺はとりあえず元の生活に戻ることにするよ」

木場はうつむいてそう答えた。

「父さんの会社と家が戻りそうだから」

「そうなのか」

「うん。叔父さんはね、殺したから」

あの叔父は行方不明ということになった。灰になり消え去ったからだ。それにより木場は会社と家を取り戻すことになったのである。

「それでね」

「そうか。じゃあ人間として生きるんだな」

「うん、これからも色々あるだろうけれど」

彼は答える。

「それでも俺はオルフェノクじゃない、人間だから」

「そうか。じゃあまたな」

「うん、また会うだろうけれど」

木場は一人姿を消した。今度は三原が海堂に問うた。

「あんたはやっぱり絵か」

「楽しいぜ、これも」

そう三原に返す。

「ギターはもうできねえけれどな。こっちでやってくぜ」

「そうか。それじゃあな」

「二度と会いたくないぜ。あばよ」

彼もまた姿を消す。最後に草加が長田に声をかける。

「啓太郎のところにもいいんじゃないかな」

「啓太郎さんのところへ」

「それはあんたの好きにしな」

そう述べる。

「いいな」

「はい。じゃあ」

長田はこくりと頷いた。彼女もまた姿を消す。しかし彼女の居場所はまだ決まっていた。

「オルフェノクだけれどもいいのか」

乾が草加に問うてきた。

「それで」

「俺もオルフェノクだ」

それが今の草加の返事であった。

「それだけだ」

「そうか」

「ああ」

三人のところに津上達が来た。まずは津上が乾に声をかける。

「終わったみたいですね」

「一応はな」

ぶっきらぼうな調子で言葉を返す。

「倒したさ。今度は復活はない」

「そうですか」

「そつちも何とか終わったみたいだな」

「はい。こつちはすぐに」

氷川が答える。

「ライオトルーパーも来ましたけれど」

「やっぱり来たか」

「それでも大した数じゃなかった」

葦原がそう述べる。

「だから俺達はそんなに苦労はしなかったな」

「そうか」

「けれど他の人達は」

津上は答える。

「結構苦労したみたいですよ」

「大丈夫か、あいつ等」

三原がそれを聞いて言う。

「まさかとは思っけねど普通の人もいたし」

「心配なら見ればいいだけだな」

草加がここで言う。

「そうじゃないかな」

「そうだな。じゃあ」

三人は津上達と一緒に往くと戦いはもう終わっていた。ライオトルーパー達の灰になった屍が累々と横たわるだけであった。

「遅かったな」

木野が津上達の姿を見て声をかけてきた。

「こちらはもう終わった」

「みたいですね」

津上はそれに応えて述べる。

「何かあつという間で」

「数は凄かったがな」

木野はそう言葉を返してきた。

「しかしこの程度ではな。他のライダーもいたしな」

「ですか」

周りではG5の部隊が撤収を開始していた。一条と五代もそれについていた。

「では一条さん、これで」

「うん、また」

北條と一条が別れの言葉を交わしている。そこには元に戻った五代もいる。

北條は負傷者を連れてその場を後にする。五代はその間に乾達ににこりと笑ってサムズアップをしてきた。だが乾はぶっきらぼうに手で挨拶をするだけだった。

「それだけか」

「また一緒に戦うことになるだろうからな」
そう木野に返す。

「だからな」

「そうだな。それは俺もだ」

木野はその言葉に頷いた。否定はしなかった。

「また君達と会うことになるだろうな」

「木野さん、何処へ」

「俺の居場所は決まってるさ」

葦原に対して答える。

「元の場所だ」

「ですか」

「何かあったら来てくれ」

すつと優しいな笑みを浮かべて述べる。

「ではな」

木野も去った。五代も一条と共に戦場を後にしていた。他のライダー達も次々と戦場を後にしていく。

第三十六章 戻る場所

彼等はまるで無愛想な様子だった。だが城戸と秋山だけは乾達に声をかけてきた。

「また」

「今度会った時はこうはいかないかもな」

そう言い残して姿を消す。乾達はやはり無愛想な様子であった。津上達の方が愛想がある位であった。

木村も先に去りそこへ黒衣の青年とスマートレディが来た。黒衣の青年が彼等に対して語り掛けてくる。

「これでまずはオルフェノクとの戦いは終わりですね」

「ああ。けれどな」

乾が彼等に言葉を返す。

「まだ色々わかってないところがあるよな」

「わかっていないところ」

「そもそも君は何者なのかな」

草加はスマートレディに問うた。

「オルフェノクじゃないのはわかったけれど」

「それも次の戦いでわかりまあ〜す」

「次の」

「はい。津上君達はこのまま帰っていいけれど乾君達はまだまだ大きな戦いがあるの」

「やっぱりな」

三原はそれを聞いても驚かなかった。納得している顔であった。「そうだったか」

「はい。ですがそれは貴方達が運命に導かれてのことなので」

「今じゃないけれど近いうちにですね」

「はい」

青年は津上に対して答える。

「その時は私は動きません。貴方達だけが」
「じゃあそれでいいや」

草加はぶつきらぼうとも取れる言葉を出した。さながら乾のよう
に。

「どんなライダーか知らないけれどな。それが運命なら」
「戦うしかないよな」

三原も言う。強い決意のある顔で。

「この力で」

「俺は決めただ」

乾は青年達に対して述べる。

「世界を真っ白にするってな。だから俺は」

「ならば先に進むのです」

青年の声が優しくなった。

「いいですね」

「ああ。また会ったんだな、あんたとは」

「私はいつもスマートブレイン社にいま〜〜す」

「オルフェノクが滅んだのにか？」

草加はそれを聞いて彼女に問う。

「どうしてまた」

「スマートブレイン社は買収されたの」

彼女は答える。

「色々な人に分割されて」

「そうか。じゃあ俺はネット部門が欲しいな」

草加は笑ってそう述べてきた。

「それでいいかな」

「ネット部門なの？別にいいけれど」

「じゃあそれでな。次の敵がどんな奴か調べたくてな」

「俺は啓太郎のところにいる」

「あそこですね」

「ああ、何かあったら来てくれ」

そう津上達に述べる。

「何時でもな」

「わかりました、それじゃあ

「僕は警察にいますので」

氷川の居場所はそこであった。そして葦原もまた居場所があった。

「俺はここだ」

「そこに電話すればいいのか」

「ちよつと地方の方にいてな」

少し苦笑いになっていた。

「電話してくれたらすぐに行く」

「何かあつたらすぐに呼ばせてもらつぜ」

「そついうことだな」

津上達と話をつけた。それが終わってから津上達はそれぞれの場所に戻った。

乾達だけになった。まずは草加が去る。

「おい、啓太郎のところに戻るじゃないのか」

「沙耶のところに行つて来る」

彼は答えた。

「あいつも流星塾の生き残りだからな。話したいことがある」

草加は一旦彼等と別れた。そして三原も。

「ちよつと保育園に寄る」

「御前もか」

「少しだけな。里奈のところへ」

「御前の帰る場所だな」

「そついうことだな」

彼もまた一旦別れる。黒衣の青年とスマートレディがそこにいた。

「貴方も戻られるのですね」

「少しな」

青年に答える。

「貴方の戻る場所は」

「それは今そこにあるぞ」
「ですか」

青年は彼の返事に頬を緩めさせる。見れば前から真理と啓太郎が来ていた。

「俺はこれから戦わなくちゃいけないだろうがな。それでも」

微かに笑みを浮かべながらの言葉になっていた。彼は真理と啓太郎を見て笑っていた。

「帰る場所があるってのはやっぱり有り難いな」

そう言っ二人のところへ歩いていく。彼は長い戦いの中で自分を支えてくれる者達に向かって歩いていく。その先には笑顔があった。

仮面ライダーファイズ 小さな星の話 完

2007・2・16

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6032b/>

仮面ライダーファイズ 小さな星の話

2008年11月7日08時26分発行